奎章
注解改正月令博物筌
八月部
二

八月部目録

△印あるハ俳諧の季を持ものなり

○養生の法○雨風の考○米の豊凶○妙薬の季○其外人家重宝のこゝろ処々小数多あるゆへ目録ハ一ゝるとず

八月

邦月支調子　陰陽生　異名并註　初丁

△白露節。七十二候　八三丁

△秋分中。七十二候　八三丁

日令

八月月の定日のそくまうこゝ爰ホあろむ

朔日

○衣服式　八四丁

△天中節　八四丁

△八月朔　△八朔の賀　△田実の祝　△田面の祝

△田実の節　△田面の祝

八四丁

△繪行器　八五丁

△絲雀　八五丁

○御馬歟覧　八六丁

△八朔梅　八六丁

○生花式　八六丁

△三村祭　八六丁

三日

△堺天神祭　八七丁

四日

○天壽の節　八七丁

五日

△京都北野祭　八七丁

△白鬚社　八八丁

八月　目録

十日　△敦賀祭　八ノ八ノ

十一日　△司召　△定考　八ノ八ノ

十三日　△和泉大鳥明神祭　八ノ九ノ

十四日　△待宵　△小望月　八ノ九ノ　△十四夜　九ノ

十四日　△豊後八幡祭　八ノ十ノ

△中秋節　八ノ八ノ

△名月　△新月　△端正月　△良夜　△良宵　△三五夜。

△名高月　△今宵月　△望月　△最中の月　△月見　△明月

△月こゝひ　△今日の月　八ノ十ノ

△芋名月　△十五夜　八ノ十ノ

△月の餅　○徇宝　△国名月

△名月蝕　△名月暈　△名月曇

十五日　△放生會　八ノ十ノ

△山城八幡祭　八ノ十ノ

十五日　△諸国八幡祭　△鶴岡祭　△誉田祭

△宇佐祭　△安の津祭

△とゝくゝ祭　△豊前門司まつり

△猪ざね祭　八ノ十八ノ

十五日　△茲磨野只念佛　八ノ十ノ

△駒迎　△駒ひき　△こうまの的

△引分の駒　△色門の的　△こまの〳〵駒

△上野の的　△武蔵の的　△穂坂の駒　八ノ十九ノ

十六日　△十六夜月　△宵不如　八ノ九ノ

△立待　△居待　△伏待　△更待　八ノ九ノ

十八日　△京都菅太神祭　八ノ九ノ

△京都御昊祭　八ノ九ノ

十八日　△伊勢菜名祭　八ノ九ノ

△長崎菩薩祭　△かさ踊　八ノ九ノ

十二日　△筑前宰府祭　八ノ九ノ

△京都西院祭　八ノ九ノ

月令　此部ハ八月日の定まり〳〵出る　さる一ヶ月のこと

△後彼岸　八ノ九ノ

△秋社日　△秋社　八ノ九ノ

△京都死活杖祭　△死杖の祭　八ノ九ノ

釈奠　△礎　△摂衣　△綴巻　八ノ九ノ

衣打　△衣四手打　△きぬろ打　八ノ九ノ

△毛見　八ノ九ノ

落水　△下りやな　八ノ九ノ

△新織　八ノ九ノ

時令　此部ハ八月一ヶ月の時候をかゝるこゝろ

△暴風　△野分　八ノ九ノ

△肌寒　△長夜　△そゝ寒　八ノ九ノ

△やゝ寒　△そろそろ　八ノ九ノ

△長夜　八ノ九ノ

草木　此部ハ八月の草木と出る　此のゝ三秋ハも用ひ来る物

△そろ汐　八ノ九ノ

△初紅葉　八十七丁
△新蓋草　八十九丁
△牡丹根分　八十九丁
△木槿花　八十丁
△縷紅　八十一丁
△金剛草　八十一丁
△花むしろ　八十一丁
△草鳥頭　八十二丁
△紫苑　八十二丁
△宇治花園　八十三丁
△薄穂　八十三丁
△狼地草　八十四丁
△紫蘇実　八十五丁
△烟草花　八十五丁
△貶荷　八十七丁
△名の木散　八十九丁
△木芙蓉　八十九丁
△桂花　八十一丁
△檀特花　八十一丁
△おろしの花　八十二丁
△烏頭　八十二丁
△刈萱　八十二丁
△月草　八十二丁
△ぬかごの薄　八十四丁
△滋賀花園　八十三丁
△穀精草　八十四丁
△黄蜀葵　八十五丁
△藍花　八十五丁
△そばの花　八十五丁
△項羽草　八十六丁
△龍膽　八十七丁
△玄参　八十七丁
△弟萱　八十七丁
△苦参引　八十七丁
△茉堀　八十八丁
△銀杏実　八十八丁
△通草　八十八丁
△王瓜　八十八丁
△眉児豆　八十九丁
△蓼の花　八十五丁
△芦花　八十六丁
△虞美人草　八十六丁
△玄参　八十七丁
△木賊刈　八十七丁
△堀　八十七丁
△なでや引　八十八丁
△石榴実　八十八丁
△茴香実　八十八丁
△蔓荔支　八十八丁
△種瓢　八十八丁
△菱取　八十九丁
△茸　△松茸　△蕈狩　△菌　△針茸　△初茸　△石茸　△椹茸　△平茸　△兎耳茸　△紅茸　△藿

△華蕣　△櫟菓　△猪苺
△鼠苺　△桃苺　△蛇苺
△天狗苺　△月夜苺
○栗　△柳苺　△中稻
△松露　△貝割菜
△粟秬引　△中稜大根
△摘菜　△菜種蒔
△間引菜
△胡麻刈
種植
△芥子蒔
△大根蒔　△蜀黍蒔
生類
この部ふい八月一ヶ月乃生るいとあり
△熊帰　△稻屑鳥
△鶺鴒　△石たき　△ふりてき
△ちゝなき　△ちゝきまわり
△ちゝなきなる　△渡鳥
△朝鳥　△小鳥
△色鳥　△鶸
△山雀　△こがら　△小陵鳥
△四十雀　△日雀
△猿子鳥　△眼猿子
△頬赤鳥　△ゆびろ
△瑠璃鳥　△眼白鳥
△鶉　△島鴨
△鶏　△翡翠
△連雀　△尾長鳥　△練鳥
△啄木鳥　△菊戴鳥
△椋鳥　△来鳳
△鶸子鳥　△鷄
△ちゝ　△蒿雀
△檀鳥　△額鳥

△伊須加鳥 八ノ六十一丁
△初雁 八ノ六十一丁
△雁 △雁音 △雁金 △まくる雁 △かる雁 △かり △天つ雁 八ノ六十二丁
△雁のつら △雁のおつさ 八ノ六十二丁
△鴇 △野雁 八ノ六十二丁
△鴻 △菱食 八ノ六十三丁
△鷓鴣 八ノ六十四丁
△鵠 △白雀 八ノ六十四丁
△鶺鴒 八ノ六十四丁
△鴟鵂 八ノ六十四丁
△鮭 八ノ六十四丁
△鮞 八ノ六十五丁
△加志加魚 △かりかく 八ノ六十五丁
△江鮭 八ノ六十五丁
△太刀魚 八ノ六十五丁
△落鮎 △さび鮎 八ノ六十六丁
△下梁 八ノ六十七丁
△崩梁 八ノ六十六丁
△蛇穴に入 八ノ六十六丁

必用

此部ニハ風雨の占ひ。發華の向方。日どりのよしあし。よろへ行の心得。作事のよしあし。料理こん立の法食物のよしあし等其外まろへあつむ尤日の定まるとへ日の日令の部よあり此部ニハ日の定まらざる八月中ノ月要用のことがらあつめしるを

八月之部

△印付ものハ前ともり俳偕の季ニ用来る物ハ

八月 生二四隂 風地觀 律中南呂 壬辰日

陰氣初て陽を犯す下上を剋すの初て起居と節は炙治ニ扶陽乃術を専らとすべし

○南ハ陽也呂ハ旅なり言ハ隂氣が陽氣を旅助するなと 前漢書律暦志ニ出

○觀ハ二陽上ニ在て下民を見て教を布く故ニもいぞら下を慈むといふり此月放生會とおこなふもこの此義ニよるなるべし

八月異名

△仲秋 礼記ニ出 △桂月 提要録 △桂秋 △壯月 △仲商 已上四時纂要ニ出 △南呂月 事物異名ニ出 ○素秋 △中商 △白露 △南呂 已上留青采珍其外諸書ニ出

和名

△燕去月 △雁来月 已上月令ニよりて名づく △葉月 下学集ニ出 △さく

はるさ月　秘藏抄出　△去年月　已上藏玉抄出
△くさつ月　已上莫傳抄出　△秋月

△月見月　△紅葉月　已上藏玉抄出
△長月　哥ハ九月ハ定む　俳ハ八月も又九月も　△竹乃春

異名註

△桂月　桂の花開く時故名つく　桂秋も同

△清秋　くゝ此頃空明ゝ清き故
△仲高ハ秋乃中とゝ支ゝ
△壯月　ハ八月辛と得ハ塞壯ゝ出　亦雅出
△白露ハ節の名ゝ註節の処あり
△南呂ハ律の名ゝ註ハ口の律の処有
△葉月　ゝ云ハ此頃木ゝ葉色づき
落る故葉落月の略也　清輔奥儀抄ハ出
又ゝつゝきハ八月の干支字略ゝなるゝ
又ゝつゝきハ初来也　ハ初て来る月故ゝ
△長月　ゝハ夜初めてゝと覺
ゆゑ故く實ハ長さハ冬ゝ夏
の短ゝ対ゝてゝと知ル
也　季寄ハ八月ゝ後ハ俳多ゝ
△竹の春ハ此頃暑さ去り寒さ来ゝ

ゝとゝる氣ゝて至て崇ゝ故ハ唐の
俗竹の小春ゝいハ贊寧筍譜出又
此月竹さかんハるゆゑ名づ
くゝもいゝうさゝ花さ月のゝさ
ハも考ゝへあるをし

△秋藏抄

初雁の声文ゆゝうゝさゝ
胡乃ゝゝ秀のゝ

木落月

△

花ゝ月ゝく名ゝ花ゝ月
雪やむゝ月ゝ色やはゝ

草枯月

莫傳

くゝハ花ゝ月ゝ
くゝハ月ゝ

秘藏抄

きゝくゝゝ
あゝぢ

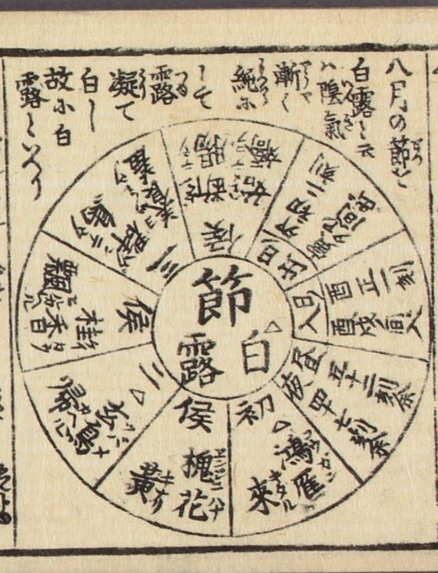
藏玉

紅葉月

紅葉月のゝ

△白露　八月の節。七十二候。草木七十二候。日出入。昼夜長短を記す

八月の節。白露ハ陰氣漸く結して露凝て白し故ニ白露と云



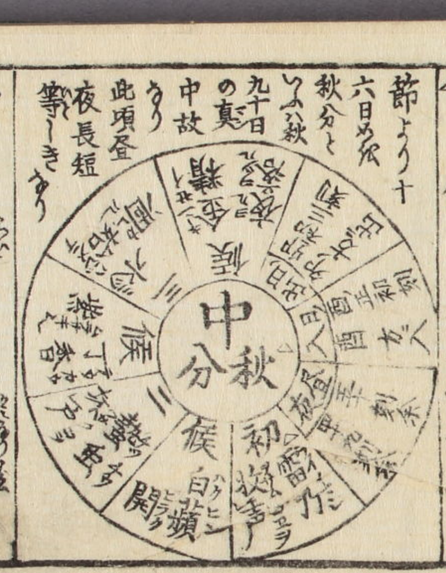
△鴻鴈寒を恐れて来り。○槐の花咲た△燕ハ此頃北へかゑる○桂の花咲た香風ふるゝ○諸鳥ハ養羞してよろゞ食物を半くそなへ冬のやーまいとする○断腸ハ秋海棠の事ゝ始て嬌ハ蒼といふ○雁燕の事ハ委しく生類の部ニ出す

節占候　今日晴天なしハ稲作十分の実入

日和もはぐきてくらしてみて火ハ屬をるゝ

雨ふれゝ實いろもくり風はうぐそひあるゝ

△秋分　八月の中。七十二候。草木七十二候。日出入。昼夜の長短を記す



節より十六日めに秋分と云ハ秋九十日の真中故此頃昼夜長短等しきなり

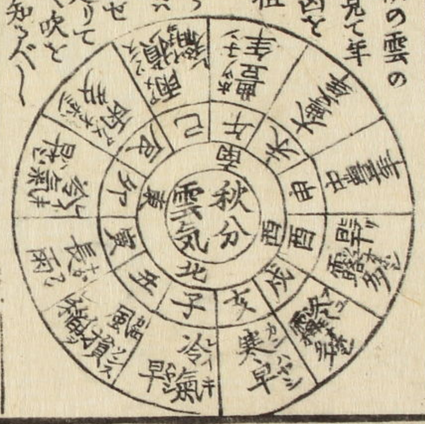
此月ゝゝ来二月まて雷声を收めて鳴らず○蘋ハ浮草なり○蟄虫坏戸ハ虫冬ゝの寒氣をふせゞ穴ゝ土にて穴をふさぐ

○丁香紫ゝい花の咲とゝ○水ハ是ゝゝ漸く涸るなり

○金精しゐる星夜の中に西海ふかくおちる落るハめくるゝ

秋分 天氣占候 今日晴天なれハ稲作よろ〜しく雲ハいあしゝ夕立なきなれハよろ〜敷なれとも冬になりて米の價貴き事もあり○西方ふ白雲有ときハ秋の收穫よろ〜黑雲ハ来年旱あり○秋分の節社日の前よあれハ来年米豊

今朝の雲の行を見て年の豊凶をある但行方定まらざる時ハ證としてを定りて一方へ吹を見て知べし



秋分 禁忌 殺生ハ刑と行ふことなれ

喪を訪ひ病人を尋ね訪ふ事なかれ○大酒を慎むべし〜みぐるしなり

他行をすゝめる

秋分 祭祀 今日先祖を祭る〜二月春分の祭同

日令

八月日の定まりなること此部あり

朔日 ○いにしへの月まとも朔日のひよりとくなれい其月中の日和大抵よろしくしかるに今日少し雨あれい此月中風雨順なりと

いろ○晴天なれい稲ふとく然るに冬まで早ばけそ麥野菜いあしし○又大ふ風雨あれい麻あしくして布の價來年貴し大豆小豆いもゝ多くかすくなし

朔日 衣服の式 今日武家万民ともに塗氣

こうるも帷子を着麻上下をえ
き礼を勤むべしはこの上下は略儀へ
○小笠原家秘書進退集に曰五月
五日より八月晦日までは帷子
八月の内は若寒き時は袷をも
小袖をもかさねべし下り
かさねをもかさねこそ
こうれをしこうへ初

朔日

△天中節　此日は凶悪の日へ
故に昔は陰陽家
より天中札とゝうて符と貴
賤の門戸に貼をこゝへ世俗同蓋武
これは陰陽一家の説より
○五月五日の午の刻を天中
節といふ五月五日の異名
とをなすなり　撮要録に出さう

朔日

△八朔　△八朔の賀△田實の節
△田面の祝△田の實の祝△憑祝○特牛節句
○此日たのみをひらもたのみ

儀式にもいひて家々たがひに物
を贈りあふ事あり○公事根源
にはこの事本説なし世俗の風儀
也とあるべし後深草院の建長の
頃より始りそめぬ田のをこそ
米を折敷土器などに入きて人
のもとへはこゝへけるとかやと法
るせり○日次記事にはこの祝ひ昔
はなかりしと事なり中世にはなりて
農民稲の初穂を今日禁中へ
奉らしめ事なり起こりあり
○一説に田の実田の面なるべし
字を頼むといふ字に通りて人々た
がひにたのみをちらむ心なるべし物をたり
あへ事なるべしとゝうり
家万民ともに厚く祝ふ事なり
○唐土にも今日勝とをす朝令蠙
勝こへ新穀を祝る祭の名へ其外
説多委しく日本歳時記に出さう
(俳)八朔や玄冥に寒さ頭のみ　東水

(狂)今朝これを移ふも秀の徳たるべし　文竹
れのもたのむ前句なるべし

朔日
△繪行器　木地にて行器乃小さきと造る目
出度繪とかきたるへ田の實
又は菓豆のたぐひさまくの物を
作りて互に相たのむの意ふ
混じて今日はくるまり京師
いまもそなへつくり八朔前
日ふい市中に繪行器と賣り
あるくも也真粉糕ふ角小豆と
ぞらつくと粘てこれと藤乃
されく御所言葉にいとう
是ともゑがひを入て贈と合と
(俳)絵形恵や上ふ射箱の紙匙露関
袋かしく絵り玄にある庵文隆鬼

朔日
△綵雀　造雑　造松虫
○造鷺　右の品も
鉛々れるしく作て繪
ぞかひをそへて児女同士み
ま　あり又意故仁と枝ゑ
さうてもれくゑ　くなり
(俳)かしとる綵雀の細工人　尊文
ぞ故仁い巻れ上の為紙る紹羅

朔日
△御馬奮覽　今日東都
二疋と献でる
馬士乗付の竹を鞭として
ひ来る古十五日駒迎の例とや

朔日
△京　○松尾神事相撲　東西ふ
分つ公京方嵯峨方と云
往古ハ内裏相撲節會の通れ
て行まつれしとう　○八幡うれその
式社傳あり　○神泉苑善女龍王祭

朔日
△八朔梅　是早梅の類なるべし
堂上方の賀儀と
も取用ひらるく事も有くとう
(俳)鉦波はや稚子の秋の梅宗曽
八朔や袁恐敷を梅の花　超波
梅嵐や行の去ふ日乾藤

朔日　妙術　今日百州の露と取りて紅結ふ

ちくさ眼とあらくへい目明ふるる
○又方　柏の露と取て洗ひてもよし
○七月晦日東ふ向ふ樹の枝と
きりて炭ふやさ今日其炭ふて
赤口白舌隨節滅ふかきて門口
ふ押せい火難盗難病難
舌等乃わさとさい法ふ
るくやきいくうへい

朔日　生花式　○秋海棠○萩○桔梗○秋菊○今日生之

朔日　和泉三村祭　堺申斐町の東ふあり開口明神
と云延喜式出當地昔の名ハ開口
村木戸村原村の間ニ故ふ三ツの村
明神と云なり又大寺とこを
ふる火ふ俗ふ大寺祭ことや
いなり住吉明神乃外宮と
称ふ祭りい朔日二日兩日なり

二日　不成　○今日白髪と抜ふは
就日　○交易又衣服と裁ふむ

三日　風雨あれい麻豆ーうえ布の
價高ー○晴天なれい冬旱え
米ふとろ○今日日月影曇りて
あざやふ見えざれい一月雨多ー
○今日い竈の神の生ふ日え祭い
十二月なれも今日竈と清くなれ福あり

三日　和泉堺天神祭　戎町東ふあり　威德山常樂寺
号を昔ハ塩穴村ふあり故ふ塩
穴天神とも云六月十三日と夏神
楽ふ今日と秋祭と云神輿を
びを島へ渡御ある事○毎月
廿五日ふハ連歌奥行あり
俳戎名くふふ社の橋うな李坡

四日　○今日將棋とさて勝ると
者い年の終ふて福あり屑
なる者い病ふかる故ふ今日と
圍棋白福乃日といへり

四日 天壽の節 唐ふてい今日を天壽の節といふ

四日 京都北野祭 ○祭神三座中い菅丞相なり昔い祭五日なりしと永承元年より八月四日ふ定りしなり 拾芥抄出

此祭甚美麗かして神輿下立賣の西御旅處へ渡御ありしと社記ふ見へたれとも今いなし

○按ずるに應仁の頃より此祭退轉して今い朝く氏子町なり芋莖にて神輿と作り渡御のまねびとなすまでなりしなり九月四日なり是と俗ふ芋莖祭といふ

哥 年中行司哥合 藍堅

たのむなるちかひをすてぬ君すてぬ
少將のまつれ佛をあがめ給

俳 さとめる紀日和と小の表都 移水

狂 いすゝ〳〵うこんのる場と成られと
そゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ 熟流

五日 千秋節 今日唐玄宗帝降誕の日ふ故ふ名く後ニ改て天長節と云今日王公い鑑と献ず士庶人い承露囊と云りのを相れる 隋唐嘉話並ニ揚子雲輝塵録ニ出

○今日交易衣裁を忌むなり

五日 江近白鬚社開帳 昔い今日開帳あり

元禄の頃なり絶なりしなり

俳 戸を閉ぢ神の名を人は知る 蘆鵬

七日 南都 ○道祖神祭 ○さい祭 ○田彦命へ 今神門町ふ社あり

八日 今日と竹酔日と云竹を植るい能あげる季い五月ふ 五月十八丁メ

十日 不成就日 今日小児の額ふ朱にて点とすれ諸病をのぞくなり

十日 和泉 ○上石津祭神休蛭子の神ふ ○下石津いも社有 此祭い正月十日なり

十日　前越敦賀祭　敦賀の古名角鹿なり○祭神仲哀天皇なり氣比社といへ神事二日より今日までなる

なを賑ハしく京師祇園に似る山かぶり等いろく有り

十一日　○来年ハ旱欠水欠と占なふ　ハ今日朝早く起て水辺より至り風波なき処の水を一處ならかゝひて其水を見て知るべし其水ひくやうなるハ来年水多き吉なり水溢るゝやうなるハ来年旱く

十一日　司召　○秋の除目○京官除目　△定考　名目抄に出

諸官人王臣國司小至まで其德の勝れたる由を奏して品々の爵禄を賜ふ日なり春の縣召ふおなじ二月より人柄をえらむと列見といひそれと昏あつめて奏をなを擬階の奏といひ

此人々を召しひ出して爵禄を賜ふを定考といふなり

哥　拾遺　賀之

いとゝふ世をふるまつの枝も我をや友とそなるらん

俳　定考や系て貝ゆ出す　芦草也

狂　飯も喰通らぬ名ふの司たち　和のそ尾の宮まゐり　越菊

十三日　和泉　○大鳥明神祭○社ハ大鳥村小あり和泉の一宮〻祭ハ年小一度

十四日　待宵　△小望月　△十四夜月　毎月十五日望月と称ふるゆへ今日を小望月と云

○十四日を待宵といふ　津中須の俳諧ふつひ出しう　和歌連歌もひ待宵とよむこと也ある人を待よい哥ゑ待宵とゝあるい人を待よいのほゝ云心をそなるも恋の歌〻

哥　十四夜月としいふ題をよまもなるハ　道香卿

あるまじき今宵の月はいかなる
明日の宮中の新を待つ　宗祇

連　明日の名月もあるを今宵
月今宵見るも明日の光る宗牧
月なしもいかにせんあるべしと　昌叱

俳　沼青や鳥のいびきの波の音　荷分
沼青やまろき月の物語　菊乙
まろ青やまろき月見の蓮　二

狂　あすはいかとあらんかぎりの
あらしとてあけまくしひ沼青　左史

詩　十四夜五字對句　同上

天意將圓夜　只爭一夕早
人心待滿時　恰作九分圓　詩魔

詩　十四夜七字對句

今夕試見先與約　未望夜
來宵定賞莫相遲　鏡久圓

詩　十四夜月詞　白居易

光彩遍空輪欲滿　光三千界形
・・・・・・・・・モ滿ニトス凡也

詩　仝　白鷗

二七秋容月色奇　獨擎吟筆
飲芳巵　二七十四夜ノ月面白クヒトリ
詩ヲ作ラント筆ヲ取又酒ヲ飲

十四日　豐○八幡祭　府内ふあり今日
後放生會行る魚を海中へ放
事殺生又演を形をかる
甚賑ワ是と府内演の市と云

十五日　今夕月曇れい方の事あし
今日南ふれば来年正月元日の
天氣〻〻又来年水多〻〻○月曇
きい鮮肴む事を〻〻又蕎麥を
実を〻〻○月あらうあれい光
多く魚を〻〻〻〻〻〻

十五日　中秋節　秋九十日は最中
ゆへよ名づく又八

月の異名ともなる。唐にも今宵と中秋の夜といひて月を賞する事李子唐の世より盛ー野雄ニ出

して詩人文人詠多ー

十五日

名月

△良夜　△良宵　△端正月　△三五夜　樂天詩アリ

△新月　△名高月　△今宵月　△望月　△最中月　△月見

△月こよひ　△今日月　△明月

△芋名月　故事あり　奥ニ出ル　△十五夜

○日本ハ十五夜の月と賞するこゝハ孝元天皇の御時より初るく舊本長明四季物語ハ出ヶ又今宵の月をゑるく読ヶる哥ハ天暦の御製ヶ

月の名の○漢いてい唐の玄宗貴妃と大液池ほのぼのとして月と翫ひなぐさ事又羅公遠ヶ此夜玄宗ハ侍ヶ月を翫ひ事

開元遺事逸史等ニ見ヶ次ヶ故事説多ー委

夏ヶ○名月の事

ーく日本歳時記ニ出ル

○望月ハ満月ヶ

通じて三ヶモ同音ヶ

又月の出る時入日と向ひ望む

ゆへ望月ヶいヶ毎月月と日と相のぞえ月ヶ

へい連誹ハ今日の季ヶ

○端正月ヶハ端ーく正圓月

ヶしハ斯ヶヶ事文類聚ニ出

○新月誹諧の季ハ三秋ヶ

ヶる昏もヶ○詩歌の説い遊ヶ委ーく三秋の部十二丁目

名月故事

霓裳羽衣曲

羅公遠ト云フ

者十五夜玄宗ノカタハラニ在テ月ヲ翫フ杖ヲ取テ空ニ投ケレハ化シテ橋トナル其色銀ノゴトシ帝ト共ニ此橋ヲ登リ終ニ月宮ニ至ル仙女數百人アリテ歌舞ス帝問コレ何ノ曲

ナルヤ答ヘテ云ク霓裳羽衣ノ曲ナリ　玄宗コレヲヒソカニシルレ又橋ヲクダルニ夢ニ隨ヒテ橋ハ次第ニ減レケリ

其後伶人トモヲ召シテコノ曲ヲ製ス事文類聚ニ出

月餅　十五日唐土蕪都ノ人サヽくノ餅ヲ作リ名ト形ヲ思ヒ〳〵ニ好ミテ人ニ送ルナリ是ヲ看月會ト云　廣義ニ出

○又麪粉ニテ作リヤキテ大中小段々ニタヽミカサネテ上ニ五色ノタザリヲ置キ桂ノ花ヲサシハサミテ月ニ供ストイヘリ　舞水談話ニ出タリ

○本朝ノ團粢モコレニナラヒタルモノカ芋ヲ食フハ諸國ニ普ク子ケレトモ東都ノ俗ハコノ日鈴ヲ食フナリ

狗寶　狗中秋ノ月ヲ望テ戲寶ヲ吐ク酔ノコトシ

助チ其寶ヲモテアソビ復コレヲ飲ナリ　農夫コレヲ知リテ月下ニ光リアルトコロヲウカヾヒテコレヲ取ルトイヘリ

續古今

天暦の御製

月こそは名にしたがへるなれとこの月ばかりまさしかりけれ

詞花　駒引きと合て　藤朝信朝臣

引駒の新をかゝへてあふさかの せきの清水ちとそ月は出ぬる

拾遺愚草

明日又秋のはつかもなをしらぬ かくらん月の行きのこゝろは　定家

金葉集

めつらしく来る秋の半はなれども 月のこゝろをそ青まさりける　仲正

仝

秋の野ぶすまをかたしきあくるまの月乃名ゝそ行くなれ　公實

柏玉　十五夜待月

月もみへいく夕かは今宵かな
かぞへてきたりし秋のなかば

詞 まちうるまでの月。月こよひでよの名月。
とれる八月十五夜。名は名の月名にしおふ秋。
まつる秋の月でえひかなる秋。こよ
ひ名高きかぢ月の夜。かた月の秋 秋の
まろこなかばの秋。雲に曇りてる月
○秋よい月は四季(しき)憂(うれひ)類(さう)よりすぐて
よみおいすらむにこよひ氷は
賞翫(しやうくわん)の人ならむべし弱(?)む之敬
推量(すいりやう)のすぐちく 合にても

連 人おほく月見る秋のこよひ哉 宗祇
去年は花秋は月にもまよひける 肖柏
月は秋の中秋の一夜乃名あら 昌琢
月ぞしるひとつよ移し光一つの 紹巴

俳 雲おりおり人を休める月見かな 芭蕉
名月や池をめぐりて夜もすがら 仝
名月や畳の上に松の影 其角
正中に米橋ほどの秋乃月 越人
庭ふく風も酒なや線の月 野水
名月の簷(ひさし)に端るや浪ちらく 湛て
名月や平家読ふあすの夕 蓮二
雲の跡松からしや名乃月 丈石
名月や月をれて撫しけら 横尼
名月や月に置なる露も寝る 千代尼
名月や酒も飲まで夜の明れ 宗因

狂 女てふ名のつく月のちらくて
まちこかりしとにへ(?)なく 貞木
名月やさそても八月や名月や 鉄永
狭花のうへ木の都なる名月 ...
去年ここで月の名月は今宵そこ
むかし鏡の名月のかげや 貞因

△ 閏名月(うるふ)
八月に閏のありし年の十五夜なり

連 今宵さへあかぬやへぜん名月 宗養

俳 又も宵ちかれ花の跡なる 来山

△ 名月蝕(しよく)

哥 いむこいひて月を
おもふ今宵しも

俳 いれて月見る名やもあかん 西符
いはんのさくらかも月のかかれ 雪堂

△名月暈　○月の暈其外名月の事博物筌の
ソの部ニ季しやを出ス

俳　傘にて面壁の月　天雄

狂　天ハ下今青ハ月こそ二つの玉
年かゝるこゝの日むすぶ　懐誉

△名月曇　雨ふりて晴やらぬく

哥　家集　藤原肅

こゝろとくへ世のうきこゝろ月今青ハ
こゝろいのかゝる月のかりれふ

俳　弘吉の義もへ月ニ殺桃鬼
沈こゝる春と月見の初秋ハ分赤面

狂　交ハれこそ〳〵向ふ月ハ分来ニ
かゝる月見の秋ふ春こゝろや来門　蕉良

△名月雨

哥　御集

ゝかゝるの面もるさけい
ありあけの月　後水尾院

俳　月と青面ハ月ハ殺光の立面
面ありてまぬの中ハ月入る海を

狂　月新ハ秋ふ今青ハ月ハ
ふりかゝる面の傘　近友

詩　名月五字對句　同上

天上十分月　一年光正満
ソラニハ十分ニ月ノ光リ　月ノ光リ一年ニ中サヤカ大ス

人間一半秋　萬里氣尤清
ニンゲンニハ半ノ秋ノ　バンリキモツトモキヨシ
サカイデハ秋ノマンナカ　コノホウヘデスミワタル

詩　名月七字對句　詩礎

不知千古中秋月　九秋半
ズヒラ　サンコチウシウノツキ　キウシウノナカバ
秋九十ヨノ二中

老却幾番浮世人　萬里圓
ラウキヤクスイクバン　フセイノヒト　バンリマトカヤ
百里外デカイ

○此句ハ哥ニ大カタハ月ヲモハデシ
コレゾコノツモレハ人ノ老トナルモノ
トヨミタルト同ジ心ニテ昔カラ
此中秋ノ月ヲ賞美スル人ヲ
イク度カ年ヨヲ世タコトカ
知ラヌト云フコヽロナリ

詩　中秋之句　萩華

詩　一年逢好夜萬里見月時　張佑

一年ノ中テ面白ヒ夜ニ逢テ萬里ノ外ニテ月見ヲスル時ハ今宵ジヤ

詩　三秋端正月今夜出東溟　韓愈

タヾシクマンマルイ月ガ東ノハテノ海ヨリ出ヅルナリ

詩　高秋渾似萬里正圓明　盛原夫人

秋ノカクナレバ山モ川モスベテ水ノスミワタリタルヤウナケレキデ萬里ノアナタマデ月ガ一メンニアキラカニテマトカナルヨレナリ

詩　三五夜中新月色　白樂天

十五夜ノ月ガムラタニサヤカナヤウニミエル

詩　名月之詞　唐　僧康白

尋常三五夜豈是不婷娟

十五ヤノ月モアザヤカニウルハレクナイデハナケレト八月十五夜ノ月ハカクベクナモノジヤトナリ

及至中秋半還勝別夜圓

月ノト五夜ナレバマタ外ノ清光夜ノマトカナルニハマサルモノジヤ

凝有露皓色爽無烟

ガコツテ露ノヤウニ見ユル皓キイロサハヤカニケムリホドノクモリモナイ

自古人皆望年來復一季

ムカシヨリ人ミナ今ヨイヲ賞レテマトセニ一夜ノ良夜トスルナリ

詩　名月之詞　唐　王建

中庭地白樹棲鴉冷露無聲

混桂花

庭ニハ月ノカゲ白ク木ニハカラスガスマタリ露ハ月中ノカツラノハナニコリナレツカニテウルオヒヲ生スルケシキナリ

今夜月明人盡望不知秋思在誰家

今ヨイノ月ハ世上ノ人皆見テ賞スル方其中ニ実ニコノ秋ノ情ヲヨクレリタル人ハ何クノ家ニアランヨクラクハ我ヒトリテアロフ

狀　月見之文　大隅漢文ナリ

良夜之清光萬里同
賞如公得閑請共遊
廣池行厨按排已具
爲速許駕

尺牘　昏暗并ニ王解

良夜　仲秋○此夜　八月十五○同上　晴光　名光○結　ヒカリ

潔萬里　万郷○一方國　同賞　(上)美

称歎　(中)縱目　行厨　(上)浅醋

(中)麁饌○淡飯　按排　(上)設不

労公　(中)悉余相計　許駕　(上)仰

望伏侍　(中)相許然諾

(状)　名月文返事

承命一輪之明輝王賞詠記

得高筵會詩客閑地吟行尤
一大勝事應招趨拜以謝

尺牘　上中下昏暗ヲ記ス

承命　(上)辱昏暗　(中)指示　一輪　一リンノ月ガ

明輝　万里素影○秋月佳名　賞

詠　絶比倫○勝幽賞○何加　記

得高筵　(上)聞説瓊席張雅

宴　(中)群友呼來爲宴會　閑

池吟行　池上遊翫　一大勝事

○詩人博物○興趣○逸興

應招　(上)一諾應命　趨拜

(上)疾至不辞(中)來謁(中)不
サウソクオンギナレニイルベシレ　○ライヨウアリテオメニカヽルベシ　○サウソク

起時(中)倒履走謝
クサン上　○トリアヘズイルベシレ

十五日

放生會

放生川ハのけるもの○元正天
皇の御宇養老四年ハ征夷の事ありて日向大隅大ゑ乱禁庭より宇佐八幡宮へ御祈誓ありて敵を亡ぼし其後八幡の託宣ありて此度の軍ハ人多く死ぬ放生會とおすべきよし神勅あり文字錄ハ扶桑記等ニ出しより國々に初る其外説多し委しくハ神佛祭礼記に出すなりこゝに

(哥)年中行司　為秀
業平とはるゝ多もとくなん
いるゝと放つ神の恵こゝに　知家

新撰六帖

男山秋の夕かゝやちらひてん
川瀬ハさるのひとりはかゝる　方のこゝろす

(俳)秋ゝ来る人足紅葉ハ放生会　松花堂
放生会ゝ多のひとあり蒐　帽子ハ魚道

放生会ゝの行事　釈　如瓦林
竜ゝ乗りて出るかもせぬ　多考川

(狂)名流ハ八ゝ放つて殺の肌
いのちを放つ国のきぬく　近友

十五日

山城八幡祭

當月八幡祭り放生會ハ諸國ハ多くあり次ゝ記す山城國雄山八幡宮ハ行ゝ事ハ勅會ハして公卿殿上人御祭向ありて放生最重ゝる御神事ゝり放生會祇園會土塔會を本朝三大會ゝ昔ハ申ぜゝゝ今ハ放生會のゝ勅使御祭あり祇園會ハ其式のこゝ土塔會ハ無ゝ放生會ハ令暁寅刻神輿御下山あり

中頃兵乱ふよりて退轉ありしを延宝七年御再興あり。

十五日　諸國八幡祭

○京都よりの御所・若宮・等持院・廣沢・たゝ枝・山崎・門出・大坂ふていの三ツ八幡祭　○江戸よりの深草但陽年毎卯酉亥　○渋谷同上　西くぼ　○鶴岡祭相州鎌倉　△志賀八幡祭近江国　△譽田祭河内国八日の神事あり十四日寅の刻そうー奥院、渡御うる　△宇佐祭豊前の国八月十五日祭礼の事當社の始ゝしいへり　△安濃津祭伊勢国ゝ昔小社ゝ寛永九年造營ありゝ今のごとし　△豊浦祭長門国豊浦郡のゝ祭八九月十五日ゝ昔八月ふあしいや　△箱崎祭筑前国ゝ豊前門司祭大祭ゝ其外ゝ博物館

十五日　磨播野口念佛

孝謙天皇の御宇敬信ゝ云僧加古川ゝ庵ゝして念佛を常ふ旅人の荷を負ひ

ゝ苦ゝして労ゝたゝ負観八年八月十五日盗賊のゝ首を切らる其庵の跡ゝ寺ゝ建教信寺ゝ号す今日僧徒集りて佛事ゝ寺

十六日　駒迎

△駒ゝ引分の使　△望月の駒△ゝ原の駒△上野駒△武蔵駒一名ゝ駒牧ゝ馬ゝ養野の事　△穂坂駒○昔ハ諸國の牧ゝ日信濃勅旨の牧ゝ禁中ゝ馬ゝ奉る今ゝ六十疋逢坂山ゝて引來ゝ左右馬寮の官人請取て禁庭ゝ奉る　天皇南殿ゝ出御ありて御馬を御覧ゝ公卿已下次第ゝて御馬ゝ給る　尚又次將ゝとりゝて院の御所東宮ゝもゝ　ゝ此勅使ゝ引分の使ゝ　○元ハ十五日ふ有ゝ朱雀院の御國忌ゝ當るゆゝ十六日ふありたり　深草

(哥) 續後撰 雅具
あふ坂の関こえて出る駒なれハ今宵そ秋のもち月の駒

拾遺 きり原の駒 高遠
あふ坂の関の岩角ふみならし山たち出るきり原の駒

(詞) いくきの駒△引わけ駒○宮人の出てむかふる（あふ坂まで出てむかひかへり）○あふちの駒○関の下道通る○山こえくる○相坂の杉むらふみならす○よそむかふる○引分るやまとむ○駒のひくや○影やくかけくる○新えゆり○立出る○引もたどらぬ○むかひえの庭○かけもあらそひぬ

(俳) 駒牽や庭てたゝれた月てはしの 李一
駒ひかや御前の羨是非はなし 其路
宮ぶり出て武士を駒の駒迎へ 宗因
駒迎へ又学の公家の名をよぶ 李波

(狂) あふ坂の関の岩かどふみたてゝ腰や引らん引きの駒 貞徳

十六日△

十六夜（いざよひの）月

△宵不知（いざよひ）○俳よハ今月の季とす哥には説多し三秋の十三日に出を

(詞) さやけさまさるの月○あけ先すそよ○いさよひの月影○山の端にいさよふ秋○去ていさよふ○きのふにもかはらぬ秋

(俳) いさよひもまた更科の郡かな 芭蕉
十六夜やちゝの海老煮るほどの闇 松雨
いさよひや舟さへ涼し風呂揚 関山
いさよひや生駒のあとをさそひて見し 木奴
十六夜ハ月のねぶりのさめる也 正秀

(狂) 酒呑て寝まじといふをあかし香にいさよひといへるもへかゝりなり 鳥兆
せうこのいざよひと雅か名つけゝんいさよひをそふに似たる見はなし 貞徳

△立待（たちまち）△居待（ゐまち）△伏待（ふしまち）△更待（ふけまち）
右八月の季に出す昼もあり又三秋にわたるといへる季の昼もあり委しく三秋の十三日に出るを

十六日 京 都 菅太神祭 菅家御所の旧趾也西洞院五条坊門の南ふ在菅神降誕の地なり紅梅殿い是ふむひて五条坊門の北まあり 猶今繞ま小社と存じて其跡のこれり神輿渡御のこと剱鉾五本ところ

(俳) 菅原の流のあり 丸ろ山 李衆

十七日 ○仍 圓月 今夕の月を名ぼくるなり 杜詩ま出こり

十八日 不成就日 ○龍王會 曾日 今日四海の竜王會ところ日なり

伊豆 ○三嶋神事 當社神祭年分七十五度の内今日其一なり

十八日 京 都 御霊祭 上の御霊い京極通筋違橋のあるこれあり下の御霊い京極通大炊御門北東ふあり上の御霊同神く

○御霊ふ崇道天皇、伊豫親王藤原夫人、橘逸勢、文屋宮田麿、藤原廣嗣、吉備公火雷神、以上八所なり近来勅して元文帝をもいいひたてまつるなり

○神の御霊い上の御霊の御旅所

○桂の御霊祭 今日相撲あり

十八日 南 都 ○西大寺光明會 今日より廿四日迄八幡太郎義家忌

十八日 伊勢 楽名祭 春日大明神を祭る前日社の前通南北ふ大車一輌あり夜ふ入挑灯おびただし 当日車を南北へひきまわし 謡樂あり

十九日 今日白髪ぐ稚くいは い衣服と裁ふ

○交易又 ふむり

廿日 ○安居天神 芝原祭

河内 ○上原八幡祭。上原ハ西岡山村ニ在

廿一日 南 都 ○韓國祭 社い高間町の南韓國町ふあり韓神の社

廿二日　今日本浴よ　枸杞湯なり

都京　○太素聖德太子會式

廿二日　**長崎菩薩祭**　唐の舟玉神　姥媽神

といふ長崎より唐人の寺四ヶ寺あり此寺ども今日菩薩祭あり僧徒唐幾束にて修行と唐人参詣して黒き棒をつかへて打ぐるくこれを菩薩踊といふなり

廿四日　**都京**　○木瓜明神祭　吉田山なり神輿一基あり

廿四日　**江戸**　○亀戸天神祭　隔年に行る子寅辰午申戌あり　寛永三年太宰府より勅請ぬ奉る　○六月廿四日夏越の祓　浅草川にて修行と

廿四日　**筑前宰府祭**　祭神は天神　菅公は延喜元年筑前太宰府小左遷　同三年薨　御歳五十九　委く博物筌に出る

廿五日　○今日枸杞にて湯浴して　○今日と天倉開と云　藥を煉てよし　又は丸藥等をもらへて功能おほし　○今日白髮とめけいみぞ　ゆるしてもよし

廿六日　**南極老人星の降る日**　祈禱善事をなす修とよし　南極星は人の壽命を司る星　今日壽星現ずと云

廿六日　**都京**　○崇德院御忌　崇德天皇の御事なり　今日京安井にて行る

廿七日　○佛會　此日諸佛菩薩東海にあつまる故に名づく

和泉　○蟻通明神祭　中通莊長瀧村在　開化天皇御宇より祭始る

廿八日　不成就日　**都京西院祭**　產土神八春日社を祭

まつり　神輿二基　一基は住吉明神　二基は住吉社を祭る

九日　今日ハ萬物陰氣を感ず夜分香をたゞ○今日水陸とも不吉の日なり遠方の旅行又ハ舟を乘る事を忌むべし

月令

此部ハ八月日の定まらぬ一ヶ月の事を出す

彼岸　當月の節より十五日まで二月へ　めふ入なく△後の彼岸ハ又ハ秋季と結ひて秋のひんゝ寺能ひらき彼岸まゝ彼岸ハ蓮三

○京　東山　昊山　念佛おどり又空也堂にもあるなり

○大坂天王寺春の彼岸と同じく叡譜人おほし

秋社日　△秋社といふ秋分前後まゝある戊の日を社日と計い春ハ二月の蠶ふ未安く記を○秋社日雨ふれハ來年豊年なり

京都**死活杖祭**　△死杖の祭ハ○褐速の社とて三條猪の熊を在古ハ刑部省ハ此辺まあり刑死人の為ハ社を立祭とゝなす中世ハ千本引接寺並ハ壬生地藏ハ春ハ念佛會あり○ハ死刑人の追善なりとハいふ

釋奠　上ノ丁日なりとて二月ハ日(哥)勅業　妙覺寺内大臣

唐人のむかし孔子の教ふけいるゝ秋の月

礎　△擣衣△綾巻○をあこと号る支ハ衣板といふ畧語なり

東雅ハ和名抄を引て礎ハキヌイタ擣衣石なり字又砧ハ作る擣衣杵ハ法ちくキヌイタハ衣板なり　即今云キヌタとして見そなり今ハ木盤を用ゐるも昔ハ石砧なりし故字も石偏ハ昏ふ女工の具の專用なる物なれ上つハこの緣益ハ砧とそ亡支ふ

東宮舊事ふ曰太子紬妃有二砧一枚とあるう澄拭もう今の木砧にて製する持盤い後世木綿を専着用とふ至て石と木ふかくるるるど今京師の深坊ふ用ゆい石盤にて綸子紗綾紬等ふつやと付ふ用へ

衣打

〈衣四手打〈去ころ打何きも衣打栢子ころ〉

こころ打こころ栢子こそ面白く打音へ歌ふ玉もゆふ衣をぞころ枕詞る類へ

輔尹朝臣

(哥)新古今

秋風いまはしむなり吹ふうう
いまや打こころん妹かさころも

夫木　名処擣衣　家長

芦の葉よりのこるさへうつ衣
をこの塩やこいふ女なるの音や

(詞)打ちこころ。打ちこころむ。くゆさ
びうつ。ひびく。こころうむ。ひちい
こる。いそぐ。綾の麻衣。月の
衣女。月澄む宿。月こころ。
沈む。ちの女が寝ぬ夜し
ら河。夜さむ。秋ぬ夜の
夜。こちの寺。里こころぎうの
。月ふこころみてこころの。うつこる
ちぎ。いねそふこころ。たま
ねこころ。夢こころ。風こ
たくこころゆる。枕こひびく
。鈴川。こる寺。松風。あれる里
。雁　夏ハ蘇武ガ故事こう旅こ多くこ合
スハ旅こありて古人の美をやろ色
あるひいろと学てるこるこ分るム
かこるもむべ

(連)宮ふひびく宿や月の旅人　紹巴
里こころこも孫こもれ宿こる　仝

(俳)我宿かて衣と学衣ハ　連国
宿よいもこ物しこ白ひこる　蓮二

宮こ立ちこころここ砧ハ　東暁
こ立ちおやここ宿ハ　呉笙

(狂)寺れ内ふ宿の名るの学ゆい
かの大これこころつちうや　玄康

詩　砧五字對句

同上

星河秋一雁　傳音暗斷続
天の河にわたりつかつる　砧の音たへたりそいたり

碪杵夜千家　鳴杵自丁當
キヌウチカ　家々にキコユル　ツキノヨトトンくトナル

詩　砧七字對句

四野山河通遠色
ノモ山モ川モ一ツ　秋ノイロカミヘル

千家碪杵勵秋声
イヘ〳〵ノ砧ハ秋ノ声ヲハゲマスヤウナ

遠村砧
トヲザケノキヌタ

夜雨中
ヨルノ雨ニモキコユル

詩　碪之詞　王昌齢

長信宮中秋月明　昭陽殿下擣衣聲
長信宮ハ漢ノ成帝ノ母ノ住居ナリ　昭陽殿ハ成帝ノ妃ノ居ナリ　ソノ殿ニコロモヲウツハ罷ノ愛モツキテサビシククラステイナリ　白露堂中細草迹　紅羅帳裏不堪情
白露ハ堂ノ中ニ生タル小艸ノアトニヲキワタレテヤカキウスモノ、帳ノウチニ居テオモヒニタヘカヌルヨシナリ

詩　詩礎

詩礎

毛見　毛しつめいもへての草木とゐつゝ耕してかひあさ地と不毛の地とゐるい是ナリ○博物志曰石い骨ゑ川い脉ゑり草木いもゑり土い肉ゑり故ゑ毛見といふ

俳　毛見海て稔ゑて行月粉蜂尾毛見のから咲ゐ蓮て行く蜂ゑ弘仙吸

落水　稲ゑ実入きい田ゑ入置ゑる水ゑたれゑすゑり

俳　ゐ蔦を苔ゑ耳れかし弘百拙二紙の紙とゑくゝや高水江水

狂　月小ちゐるさむひ世界ふ結変つまのゑゝ紙高一水ゑ弘半龍

下簗　魚の身重くゑりて河下へ落つゝて簗とうけて取ゑ

哥　夫木

ゑ時ゑ名所の川れりやゑ
ふゑ行る水いうゑゑ

俳　ゐり簗打の弱ゑて行高り支考

△新結 今年の新糸ふて織くる結と武州野州上州へ出す

時令

此部ハ八月一ヶ月の時候をかく事記

△暴風 △野分。八月ふく大風と草木を吹

(哥) 源氏物語

風さわぎ村もとゝのふゆふへも
ものすゝしかりしかれぬ家隆

新後拾遺

かりふきの庵まもそゝをあひさゝれ
みかりのたくぬ小のゝもれ家

夫木

きの今そとりのなはしぢ原のゝ
みかりにそゝ岡のへの乃ちゝ

後京極

(詞) 吹ちゝ。みかりの。なはしぢ原の。乃ちゝ
行東。あゝ恒ね。あゝきぬかの
。みかりの風。みかりのゝ。

(連) 吹ちゝ。みかりや庭の秋萩 紹巴

(俳) 我菴いかに建ゝ時分ん 柳居

(狂) 白家と風のりたる秋のい
性水晶の玉そちりかゝる 小唐山人

△肌寒 △夜寒 △坐寒 △漸寒
△朝寒 △そゝろさむ

(哥) 新古今

嵐風の澄そこ寒くなる夜
萩乃上葉の散そ初しき 基俊

(俳) 月ふり蕭条初の秋き水五羅
澄きや石の仏と刻ひ寒き 嵐

△長夜 夜の至りて長きい冬
ものふ永きこと夜と秋の

季こするい夏の夜の余りう
みしらぬ此月いたちふ長く覚
ゆる故なるへし八月ようり九
月ふ渡る夜

(詩) 遥々鐘漏初長夜耿々星河欲曙天 トモ見エタリ

(哥)新古今

大ひなの塚の松さへ老ぬれば
若ばえしつる身とぞおもへる

(能)初秋と云ふ

初汐　此月は汐の大ひ満る月故なり。○秋は金気
金は水と得て盛なる故此月大汐有時なり〳〵無名抄ニ出

(能)初汐やとゝ移ると大の拵え　東巴

打ちも藻を伝出や秋の汐　詩人

今ぞなるや初汐みれば〳〵岩　風光

(詩)初汐七字對句　詩礎

雲日半陰川漸満　吹地轉
他所ノ雨ニ空クモリ川水ガ一ス　カヘニ十三ヲオコス

客光皆過浪難平　就天浮
月日ハ立ヲテナミハヤリ高シ　天ハドノヤウニ汐

初汐　落事

弄潮之戯　伍子胥呉王ニ殺サレ其屍ヲ
皮ノフクロニ入レテ江中ニ流レケルガ其屍流レニヨリテ波ヲ揚ゲ潮ニ依テ往来レケリアル時子胥白き馬素車ニ乗リテ潮ノ上ニアリシヲ見ル者アリニテ是ニ恐ル是ヨリ毎年仲秋既望潮水極テ大ナル時ハ衆人旗鼓ヲ以テコレヲ迎フナリ

草木

此部ニハ八月草木ト出ス　秋　如此印ハ三秋ニ用来る物

初紅葉　秋木の葉黄ばむ又ハ紅ゝなるを云ふ

紅葉もる木ハ。機樹。楢。○合歓。其外数多〳〵中にも
かゝでの葉の紅〳〵なるハ見
事なれ人々大ニ賞する故紅葉
〳〵ハかゝでの事と思ふ然
ともいへとも紅葉と哥にもよ
こたる雑木の紅葉なり竜田川
の錦とよまれしも雑木の紅
葉なり　能楷ニハ薄紅葉　初
紅葉と句作して八月とす　楓

のこれ紅葉しまるハ後の事なりとぞ紅桐のこれ九月の部

(哥) 夫木 あきの葉の色ふかくなりにけり深きやせくの深きらん

(俳) 桑物へゆくれ思ひのあき葉　梅堂

物紅ふ傍の似の責かる　重頼

△敗荷（やれはす）　△荷衣　○蓮の葉れ秋
△はいか　風に破れ折れたるを

○荷衣ハ葉と衣と見立たるを

(哥) 秋風にあれし池の蓮葉も波うちよせてくだくなる　公武

(俳) 破蓮のさまを笑ふて夜蛙　黄道

(狂) 白露とむすぶも嘆て月影もくもりて見ゆる池の破蓮　貞柳

(詩) 敗荷詞　東坡

紅錦機空水國窮。轉頭千盞偃秋風。〔夏ハニレキヲオル ハタノ如クチル ハスノ花モチリ アマタノカサノヤウニ見エタル葉モ 秋風ニ打タヲルゾ〕鴛鴦一段榮枯事。都在沙鷗冷眼中。

花ノサカリニハ其アタリニアソブ鴛鴦モ一時ノエイグハヲキハメシカドモ ソレモ今ヤブレ蓮トナリテハ 鷺モホイナク思フベシ 盛衰ハヨソ目ニ見テ井ルカモメノ眼ノ中ニアルコトジヤ

△新蓋艸（かりやす）　形をとき、似て秋穂となす

俗に刈安といふ (和名) かりやすの色ぬ

(異名) 黄艸。菉竹。葵艸

本朝染色家に用ゆ物を染れ黄色なり ○唐とく形違つて竹似て細くなりし 茎も煮て染物とし 本艸に出 ○唐ふハ竹の類として詩ぶも作る

(俳) 禰祥うけ紋りの安かりの色　秀石

△名木散（なのきちる）　俳諧季寄に昔より出て分りしは近世の説に榛櫟柞の類此頃紅葉して散るの物名とし 尤左も有し冬の季に出る名草枯ても同意え

(俳) 十日目の菊かれ果や名の木ちる　芝山

△牡丹根分（ぼたんのねわけ）　夏川の圯とそう乾う古き圖の土と

細き砂に交ぜて蒔く蒔く八九月
紅き芽出せ後この土を
移し栽べし糞溺と用ゆ
よろしかるべし冬油渣とを
根のかさりに置べし
能 拓とかてか家の達ぬ宮中大成
狂 果敢ない花てゐ寸ふ山茶の
冨もれ拓さいろるて松室

△木芙蓉 △芙蓉しわうもく
○木蓮 白氏文集○拒霜
事物異名華木 本艸 和名 木もちす
八九月初て開く故拒霜の名あり
○本艸李時珍が説ふ芙蓉と
いふい荷花のこと偶此一物荷花と
相似ることを以て木芙蓉と号くこと
云云 後世二物一名に混ぜ用ゆ
故終に荷花と水芙蓉といひ
此月の木芙蓉といふ
俳 教ぬうちこそやうに芙蓉い 潮春
木芙蓉や花そ咲ふ紅もあり 嵐雪

△木犀花 異名 巖桂○木樨
○花桂○七里香○本
艸家の説ふ木犀へ巖桂に
本艸尤然りされども桂の種
類多したしかさだめがたし
此い白花にて香気甚高し
△桂花 是とべての桂のことを
いふ一種い巖桂にて
木犀に一種い菌桂ふて葉に
三ともちの文あり其花黄色又
白色あり但し加茂祭りに用
ゆる桂い花三四月にて是ふいあ
ら子享保中南京種渡りて所々
ふ移し葉の筋末まで通る是
上品あり肉桂桂枝桂心官桂此
木より出るあり されども日本も
うよると桂樹はあり多分中世
の人はあらざるべ
○月の光に桂て久しくの
月はあるてふるくるん 光俊

詞　月のくゝ。枝と折。枝の花。かつれ行ふ。くゝ枝

俳　白ひさゝ家ゝ濱ら汀桂ゝ李吟
ゝ山ぢゝ葦酒いゆゝせ木擇な芭角

狂　只ひゝう紡おりゝゝるの屋
俤も中稚ゝ木擇の花　実朋

詩　凝露堂木擇　楊遲秀

夢騎白鳳上青空徑度銀河
入月宮スグニ天ノ川ヲワタリ月ノミヤ
コニ身在廣寒香世界覺來
簾外木擇風　身ハ廣寒トイフカウバシキ世カイニアルト
思ヒシガ夢ガサメタレバスタレノ外ノ木
犀ノ風ニニホフノデアリシレヨリ

△縷紅

葉細密にして杉藻のごと淺青色

△檀特花　一名西蕃蓮。葉ハ芭蕉ヨ似て三四尺ヨ過ヒを冬ニ枯て春生ず七八月莖とめんでゝ花と

ひゝく赤くして穂のごと實とりけて念珠ゝす薏
苡仁ヨ似ゝうゝ
俳　ゆゝ芳の淨ゝ澤ゝや擇ゝ亀山

△金剛草　一名狼牙。其芽獸の牙のごゝ
花の後　小豆の莢のぶゝくれ
して中ニ実あり根甚さつよ
して牛馬ヨ食ものゝ
俳　弱つゝゝく公もゝ弱つゝ乙由

△白粉花　夕錦　此花駿州
よい野徑ヨ一面ニ
満ち咲ゝり春苗と生ゝ冬い
枯る葉雞頭のごゝく花丁子
ニ似ゝり大抵赤ゝ其外様々
あり実ヨ白粉ゝうゝ夕ヨ開き
朝ヨ閉む高サ二三尺ヨ成る
俳　わゝ乃いもかゝ乃ゝ多ニ実ゝ豊蕉
狂　芝赤ヨ咲て月秋の中ニ花
ヨ成ヨ後ヨ花の花ゝ　不一

花紫 紫艸の夏うり○若紫い春うり花紫い秋うり 御傘ゑ出 又若紫春ゑ花い秋ゑ〻連哥産衣ゑ出 其外俳昏ふ紫艸と花紫といいて秋〻若紫といいて春ゑす然れども今世間ゑある紫の花い二月ふもあ〻ず八月ふもあ〻ず四五月ゑ咲うう○雑談抄ふも紫艸と春秋二度ゑ用ゆること決詮しがくこたらや若紫い春月の嫩蔵ゑこそという

哥 古今ふの一ゑもゆへゑ武蔵のくみきいえゑうう袁ゑとそうる

烏頭 葉艾ゑ似て厚〻花の色紫にして形い烏嘴ゑ似ゑう因て名づ〻茎物ゑ烏頭と云い根ゑう

草烏頭

花葉象 大抵川烏

頭ゑ類して藥力いうすし毒力いつよ〻所々より出を○摂州金剛山及のもうかびく〻ゑゆるりの則この艸烏頭ゑう

俳 花咲い時も一ゑ〻ある艶 竹夏

刈萱 萑麥 葉毎ふ五葉茎相對して生を花い胡羅蔔又い景天草のごし初青く後黄ゑう女郎花ゑ似て枝葉たゑるのこいへ或説ゑ刈萱い芒の類ゑう

紫苑 一名○紫菀○夜牽牛○古哥ゑ物の名ゑよこそ此うこゑ〻

哥 古今ふうもこそこ〻とゑひいとうつろひまる○俊頼の抄ゑ親の塚ゑうへうる故事ゑう物ゑすゑ一せぬ人ゑう即ち鬼のたゑ〻へうる

草ちるゆへ鬼のあと草又あと
ふるもいとゆかしうる花るい万葉うた
是のうたのうこん對ゆるゆる
かくあわて名づけなるこ此こ
大よ論あり　補遺　出す
○謡曲大江山よ紫苑くしてふ
やんれふのあとうたは誰
がつゆ〜名なるそとあ

(俳)あさのひらふ花の花の色　貞六

月草　漢名鴨跖草　蟬花と云

○花を碧露艸と云○俗よ

△青花ともも云○夜月の影ふさ
くといつり久しく咲くゆへ
百夜草ともも云花の汁と紙
ようし染具こす故ようつ花
ともいひて近江国よ事ちこと
女の職こす昔此花こて衣とす
つる紙月さの花とう衣色の
移りやとく恋哥ぞ多くとあり

万葉にさ竹よ夜の子ちこ勅書ふ
ゆきてのほいうつろひぬも

(俳)よ枕のひぢふ拍の月さう色花　季路
月若や夜る咲く物いろうろう　居諸

宇治花園

宇治ハ應神天皇の離宮ありしと
后よ太子の御坐しなりて桐
原日桁宮と申ス時の御園
ありは是と兎道雅郎子こ申
奉るあり花園い多き中ふ萩と
專らとなるこ今の人も同〜

慈鎮

(哥)新勅撰
着こ〜しのあ〜やふ家ちん
せばうち山の秋の花ぞ
○此哥にても知へ〜○蔓絡輪○
糸切歯等よ宇治の関白の花
園こいつるい非あり其故い臣下の
花園とその子孫こて慈
鎮和尚のよみきもふ歌き
答ちこいつり

(俳)花屋敷の花園と落葉考
[illegible]園なる自慢く細代の白羽

懸賀花園

近江大津より天智天
皇の御そのゝ旧跡ありとて　爲遠

(哥)新後拾遺
[illegible]
名のゝこゝろの花屋

薄穂

△尾花△花薄○初尾花○幡薄○暦月物名名

七八月長さ茎と抽で穂と
なす是即ち花なり形獸の
尾ふ似たり故ふ尾花といふ　平貞文

(哥)古今
[illegible]
[illegible]

夫木
[illegible]
いとゝ妹がなきゝ[illegible]

人麿

玉葉　原薄　入道前太政大臣

[illegible]の禁[illegible]
[illegible]夕風[illegible]

(詞)まゝく○なびく○秋風○尾花
波なる○袂○神[illegible]

[illegible]○尾花かりそ[illegible]○[illegible]の部よ
[illegible]見合すべ[illegible]

(俳)和尾花風[illegible]東巴
[illegible]花すゝき蓮二

(狂)招[illegible]
[illegible]の尾花[illegible]貞德

尾花の薄

○[illegible]の薄
○[illegible]との薄

○夫木集ふ三種の薄あり[illegible]
鴨長明とみる哥あり尤ふ記す

(哥)[illegible]
[illegible]　長明

[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]　長明

花すゝき　八月の末より花ほゝけまゝ
ふるほとゝなりて深すゝ　西行

○此三首の哥にて考へべし一首
ハ増穂なり一首ハ白さ入りて色
白さなり一首ハ蘓芳色なり
又十寸穂と云て尺に満る穂と
もいへる説をなりもとべて中
頃より　右の哥のごゝく　説
出して　いろく　臆説あり　信
用もるふ足らずといへり

根地草　河原に多くあり　初
ハやゝ　めい蓼のごゝく　長
て葉五葉　莖葉とも　黄緑枝
の末こゝに花あり　八月なり

穀精草　又一名つくも云一名
たいのぶち　竹筒草　○鼓槌草
○春より生ずるゝ　花出
ざれい分ゝ　八月大鼓
のぶちれゝ花をひゝく
葉い細長し

（俳）星菜や掃んと溝の天の川　東
雲菜や結よ一茎花ハさを　蛇喜

紫蘇實　一ふちりめん草と云
花瞑ち實なり
穂とする　塩漬〳〵貯ふ
（俳）紫蘇の乳も紫の名残　九一

黄蜀葵　岐多　花黄色線に似て大ひなり
（俳）花ほゝけ何ぶ事なるとろ　北精利

葉ひは
ふ似なり

烟草花　（一名）烟花。たばこのこと
ハ世人よく知る処なり
（哥）あ方ぬもむ浦をれも烟草よ
人のをもねのもとゝそあれ　後水尾院

藍花　花赤くして見るふ足
藍汁い葉ゝあるて
五六月ふ刈とる物ゆく多く花
と見るこゝなまく種とする
為ゝ残せ〳〵物ふ甚ゝきれいく
（俳）一ゝこの名ゝよあゝて藍の花月華

△蓼花　いゝ紅白数品あり

△蓼の穂。又穂蓼共

○大蓼。毛蓼。大蓼。四季とも

ふ花のある物あり　枝葉少し

ちいさく味ハ勝れたり　大蓼ハ五六尺

ふ立のび幹も太き者ハ小児の拳

毛蓼ハ大蓼の節無ふ毛あり

哥　万葉集

我宿の穂蓼そ古幹つゝもゝ

ふ多ゝまそ出ふ出ふ出ふ

狂　蓼むく食ふ虫も出ふ出ふ

畑をく　鋤ふたやさしう　穂音

△蕎麥花　斯のごく箱の内

の角といふより世ふ紋処の角切

角といふ物ハ稜折数しいふ物ハ

そゞ云も実の三稜あり名

付しゝそ花白く少し莖の下ハ赤

一名　○荍麦。烏麦。花麦。種ハ

七月花ハ八月刈ハ九月あり

俳　蓼麦ハ実ハ花ハ共に赤し　芭蕉

蓼麦の花ハ白しやはらかの岡の松　蓮二

蕎麥故事

河漏

河漏津と云処

ノ蕎麦ハ天下

第一ノ名物なり因テ蕎麦ヲサ

シテ文人墨客ハ河漏と云ナリ

△蘆花　△芦の穂　一名　蓬蕀。

又葭ともいひ葦ともいふ

大小よりてその名あり

もろゝ種類あり　花ハ風に

あゝて雪のごく　ちり地にあ

つまりそハ絮のごく

哥　紅葉ふ汐こちらそハ雖波ハの

あれ穂ようそ哉も移る重之

俳　芦の穂ふ美ハ　ゆかりや家の猫　去来

詩　芦花五字對句　同上

黄葉倒風雨　沢国幾千年

白花揺渚洲　漁村両三家

詩 芦花七字對句　詩礎

一灘浩々花如雪　舞秋風
川ノヒロキニアレハナユキノトクトシ　ナカセフカセニフカレニケリ

両岸蕭々葉帶風　迷夜月
リヤウガンシヤウくヨハハオブカセフ　ヤケノヒロ月イロニカフ

項羽草　花はがんぴのごゝ
表紅裏黄ゑ

俳 たむ馬の溝か敷　待價

虞美人草

此花とくと季せつ定めがたきゆゑ今案ふ此名出て日浅きゆゑ大和本草ゑハ名花譜及ひ國史ゑ引て四月花咲と云ふハ今俗間美人草と云物ゑ罌粟の変生の物と見えたり一名美人罌粟と云ふ花景。類説本草時珍ゞ説ハ各美人蕉と云ふ説も決断ちがたし然ともゝ謡曲の項羽の文ゑハ露刈込て秋草の葉毎ゑ影やうゝ〳〵一部の趣意秋ゑ美人草秋草ゑ決せり今案の口決ハ云ふ所を以て云ふべし謡曲の作意ゑよりハ本朝ゑ於て美人草の名称とて三百年ゑ及ぶ依て是と據とせハ秋ゑ決して可ふべし

龍膽

〈龍膽 古今集ゑ出す〈蛭龍膽〉〈蔓龍膽〉三種ゑり花葉ともに皆其姿ゑり野ゑ多し

和名 えやみ草 和名抄　たつのこ艸 ちふ 日上

延喜式 わすれ草 ちは艸

いもさ草 能因集　やまひこる 字鏡

哥 古今集　物の名　友則

秋高の花ゑくるこゝ
やまハゆるしやこゝ
ゆもまゝ

桐壺 あんぎやさいさく

玄参

又ごまぐさ。ごまのけて草 一名 山麻。野芝麻。能消草。数呂ゑり胡麻ゑ似ゑり葉青して

黄色と帯しう花い此月枝毎ふ穂と生ど長さ六七寸肥こる
い二尺ふもてこ所ふまりて小異
あり江戸の花いくるの一つなる
ゆてこる跡い羽のごとく故
いるの印つかの名あり

△木賊刈　刈千して物とそぐ故
砥艸と名づくこう

(哥)夫木　仲正

さくさこる芦ぬ弟ふの木ぬるよう
くれいろる行の秋乃月

木紙刈るもくは乃麻こるの秀天

△茅萱　△萱刈　△萱菅　△萱
軒端○三秋の此二丁目出

△茜堀　(異名)茹蘆　(俳)よい宮
ふ深るもは茜場富天

△苦参刈　(和名)こひう草○牛
の舌痼○堅葉根と

りふ茅用こす葉い摂ふ似こう
春生ど冬凋む花い黄白根い黄へ

(哥)あれよるるさ田のあぜふ宮生
秋まりいくもやるるこるる小西行

△たうやく刈　千振こいる物こいう
葉なるさ如く花

桔梗ふ似こう苗五六すして一根ふ数
莖生ど然ども千振い秋白花あり

△藥堀　此月茅草の根を堀
べし根実して気つは

(俳)茅堀えい供ふ月きこあり四水
紙の柄ゑ朱てぬく行あり千振文古

△石榴實　一重ゑれい実と綴ぶ
千重ゑれい実ゑし

皮の内蜂の巣ぬこく膜と以
てこれと隔つ実い赤く人の歯
のごとく数甚こ多し一つの内あり
物数鬼子母神と祭ふこれと供
もろい子多こ故以て子ゑべし

妙薬　咽のかいるこ

(哥)續後拾遺　物の名

ちるもこるぬこきこ稀ふ逢

ひさ〻黒髪のこゝ〻ろ　ひろ〻

(俳)木ゝのいろ〻ぬれ〻ぬれ　柘榴ハ全流
ぬれ〻ぬれ　柘榴ハ會山
ぬれ〻ぬれ　柘榴ハ亀山
ぬれ〻ぬれ　柘榴ハ乙由

(狂)一ゝ〻ゝ落ゝ〻ゝ　松室

(詩)柘榴五字對句　同上

低垂圓玉紫　西域移根至
半擘碎珠紅　南方釀酒來

(詩)柘榴詞　鄭鮮

高枝重欲折　霜老拆丹膚
試剖紫金椀　滿堆紅玉珠

高キ枝ハシケリテ折シヲスル二秋フカク霜ヲカサヌレバオノヅカラ赤キハダヘワレタルヲ金ノワンニ入テミハアカキ玉ヲツタクミチタリ

銀杏實

花ハ二月ゆゝギンナン
唐音ゝ子と結ぶ甚迄
霜を経て熟爛と食すゝ物ハ此
仁ゝ〻ゝ銀杏の仁二種あり三角の
物ハゝゝ雄木ゝ二角の物ハ雌木ゝ

(俳)古家や千年ゝ経ゝ銀杏の実青由

(狂)秋来れゝ葉ゝゝ金の色ゝ
実ハゝゝゝゝゝゝゝ　負室

茴香實

(異名)ゝゝゝ　(俳)ゝゝゝ

通草

(異名)烏覆○蔔覆○
木通のゝゝゝ　莖ハ細ゝ
孔通ず故ハ通草ゝゝ
てゝの月の季ゝ実ゝ以

蔓荊子

(異名)ゝゝ　(異名)癩葡萄○錦
荊支○蔓荊支ハ葉葡萄ハ似
ゝ七月比黄花ゝゝ八月
瓜ゝ結ハゝゝゝ五寸ゝゝ

(俳)若瓜や血ゝ吐きゝゝ　不一

(狂)ゝ青ゝゝ芋ゝゝゝ　若瓜ゝ
ゝ〻ゝ　茶也

王瓜（一名）落鵝瓜。地瓜。新羅葛

△たがさこのきつひの枕。藪の中ふ多く生て蔓中へ兼馬蹄の上鬚あり五六月花あり栝蔞の花に似くう白花あり瓜ハ栝蔞ようり少ク長く秋冬熟して赤く栝蔞熟して黄なり中ふ子あり蟬の頭の如しよく似くう又和俗むを比文のさまに似たれば玉章の名ありこれを炒り又ハ醤油煮ふ食ふ

（俳）むつくやなのまひとる秋瓜千子又茶や菓ふ伝れ果ぬかす瓜仙処

（狂）清ふ蔓ふ比かりすハさもあんん蔓よかすの瓜ハいろゆる真穂

種瓢△種なるを比。実とむすん物ハ野菜の類ハ来春まく種とたくハへんがふあふくべひても苗子そ其伝

ふて軒下或ハ火炉の上をふ吊とん乾さたるとひきき種とるなり

（俳）又ハ月鼻の上ふ吊る種ハ秋江佳筑

眉児豆　京大坂ふて△隠元豆と△七月九日三枝ふ等持渡りしうという江戸ひてらぐ豆といひ西国ふて籬豆といふ

（狂）信元豆ふむとミ豆ふて焚うハ人の人ふ物ふ拍子をあれ　百拙

菱取（異名）凌角。角ハ誤てさかれい手足ふ泥つくあり故ニ菱。凌角ふ成の名ハつ八九月採るハ生ふて食ふ

茸菌△茸△菌△かくれ如くく茸類の惣名ふて和名抄ふハ菜蔬ふ付ふて分らていへども皆くさひらふ菜茸の字ハ同しくきのこ肉ふてもふ笠ふてりのとひて岩茸

革茸　木〻〻げの類多し。○菌の字ハ笠ある物といひて松菌ト
沿椎菌の類〻○和名ふきのこと称するこゝハ夫々の木に下れ生
ずる子れ〻〻しいふ心なり椎の木
の下ハ椎たけと生ず榎の下ハ榎
たけと生ずる類多し
○菌い木菌あり　△土菌有生ず

松茸　松の氣と以てその
下ニ生ず人のごとく知
る処あり○茯苓多き処い茸
とゝ〻る西国ハい茯苓多し
茸狩　るへて茸類と狩といい
へども先松茸と第一とす
俳　うへたり人〻そゝゝ○菌うり　蓮二
たる松や云狩いゝ〻ゝ云その破衣タ

初蕈　秋山野の松樹有る
地ニ生ず　畫ス

石茸　○石茸○表皆く裏黑
く岩峯頭巖上ニ生ず

だ嶮〻〻所ニ生ずる者故
採る人番ひのうて大木ふくり
ゆくり　れろされて取ずうそゝ
ひとあやうし

鼠蕈　漢色　蘑菰蕈○朽木
老樹の根ゝ〻〻出づ

針蕈

鼠蕈に似て
繊細　数十
本並び生ず針のごとし

俳　針茸や志ろ女のそゝぬけ　鹿松

榎蕈　△滑ずき　俳　なめ蕈
やゝ足含の供の絵ゝ　黒森

椋茸　椋の木ふ生ずる物とい
へり形榎ゝみふ同し

平茸　異色　天花蕈○山林の
湿地ニ生ず

兎口茸　湿地ニ多く生ず微
の表裏色端まぶり
ていそちふ似ゝう滑らふ乳
あり略蜂の巣ゝ出ゝ

△紅茸　漢名　紅菌　一名朱蕈　和名　うぐひす茸　○こて

たけ○赤こけ○仕丁こけ○微赤

大毒あり本艸に葛花菜云も此類之

△萑茸　芦荻の中に生じ　俳　おそ茸やかりの宿　季君

△革茸　又鹿茸といへり秋野に生

も色赤黒そ

△標茅蕈　代の松寺玄ぢ孔宗南　俳　松の根ふる

一説に云に在所も志ゑちゐ石理

只今黒いこゝろ女こ志めちゝ　兎貫

△舞茸　平茸に似て　俳　舞ふけん面白さ　黒人

△楓蕈　大楓子といふる木の上に

生ずるありこれを食へ

い笑ふてやまじといふ是毒の

あるうなるへ笑ひやめん死とる

△猪茸　△蛇茸　△天狗茸

△月夜茸○栗茸　△柳茸

つぎも秋生ずるものゝ毒おのく

毒あり食へからざる其外種

類多し悉く志るす能

あらざる又春夏冬いも生

ずる茸あり人〻へ追て

補遺ありたん

△松露　菌譜に麥蕈○沙壌

の中に生ずるといふ

俳　五つ曰ツ郎ふとる松茸孔芭蕉

えるゆゑ見まの老う松茸孔李由

写の密杖て拗すせうろ孔蕈五

狂　茸紫いろあるてい玉とあさむけて

松の松茸のうゝ孔さい似す中庸

○茸菌毒あると知る法

新茸下に文字ある物文字いへ茸の

夜光りある物○爛まて出るゝ物。

煮熟して人を照し影うつる物○春夏蛇のうろ物○此うろ皆人を殺すなり○又塗物の上に久しくわくいれば慎むべし

中稲

八九月刈もるゝ中稲とつゝみ早稲と

(哥)曽丹集　我せぬる中稲のつゝみ彩殖うらてむらゝく穂さけ紫ゝ

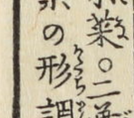
(俳)公あそ小弱ゝ柿そ中稲り貝之

粟秬引

五月七月の部ふも出ゝう今い両種ゝもい晩種あり秬ふい稷黍の二種あり

(俳)我門のさひく秬畑嵐雪

貝割菜



菜の種土を切て漸く二三寸

二葉の形貝とゝろかるか似るる故ふつゝ大根蕪とも同時ゝ

摘菜

小菜○二葉長ゝと初て葉の形調ふとつゝもろゝ

間引菜

摘菜の少し長しなるとゝ種を多くうゆる故長ゝる時間とゝ引ゝ故ゝ名づく

(俳)ゝるとゝるハろゝの絲ゝ紅葉小蕪夏

ろゝ菜やゝの絲の又ゝ可丈菜畑ゝゝ分と入ゝ間引ゝる冬花

(狂)ろゝ菜の孫も孫も同ゝ地名かゝゝゝゝゝゝ隠士

中稜大根

(九)ゝ筆ゝ油のゝゝ

菜種蒔

是ハ蕪菁の種類ゝて国ゝのかゝふあゝゝ是と真菜ゝ又油ふゝゝゝる物ゝゝ油菜ゝゝ

(俳)春と買ふ去の種も苏ゝ素光苏ゝゝハ池ゝゝ菜種ゝ蜀

胡麻刈

(一名)昔嚢○此月初の頃ゝ八稜ゝ

胡麻と菜と種る法のごゝくしてゝゝれハ苗と生ゝ如ゝ

りの根をもてそ〳〵ゝ壽命の
ながさうなり

種植

〈芥子蒔〈大根

蒔〈蜀椒蒔〈蒔○かし数種あり春

不老といふて第一とす白芥尤
佳なり○大根亦数種あり○
八月十五夜ふ種とまけい花実
とも大ふはしいべはしも月種とまく
なり三才図会ふ出そう

俳　けーまうはの路庭うん　中甫

学案のいなう坊まや芥子花　紹薫
大根ふるるうんのたいあけて花清白

生類

此部ふハ八月一ケ月
の生類をあつむ

燕歸〈燕いめる○燕い春乃
社日ふ來なり秋の社日
〈ふ帰るゝ本艸綱目ふ見えそう二
月の部ふ出せ爰ふ畧す○燕

とゞまりい春なり本艸ふ越燕
胡燕の二種あり越燕い常の
燕なり胡燕い和名阿萬止里
といふものいて俗ふ深山燕といふ

哥　夫木　菓とらひて海ゆとうら藻
あれさへ秋の風やうれしき

俳　いめ藻行彼の札の寺ぬ真
そろ〳〵先ふ帰ふかるん長水

方丈い建なり〳〵去めつくるれ蠱
地いそいそるさえ法いなるめ望可

狂　燕の後ろ家も秋の日ぬ
弦ひりなのかるを立る　如来

詩　帰燕詞　崔道融

海燕頻來去　栖人擺滯溜
ツバメハ海ノ上ヲ春ト秋トニタビ〳〵イク
リキタリスルニソノ燕ノスミカニナル我
ハイク年モコノ他国ニナガトウリスルコトヨ　天邊又相送
腸斷故園秋　コトシモカノツバメガ空
トヲクカヘルヲ見テハラハタノタユルホト故郷ノ
秋ノケシキガコイシイトヘ

△稲負鳥　諸家の傳說多し　井手の
つゝそ　鶺鴒あり　理あり　元来
古今の三鳥の一つにて　極秘なり
い哥ふかみくさいくさ　家隆
尚又委しくを追て補遺に出す

哥　夫木
秋の田の稲おほせるかりほ
木の葉ちりよ雨の降ん　忠岑

古今
山田もる秋はかなしも
いなおほせるのかりほ　赤人

一書に三鳥化用の哥　赤人
風の扇の秋の
いなおほせるとゝ

俳　夕毋や雨と
狂　もつとやみて
何とゝ

△鶺鴒　異名　鶺渠　○雪姑
和名　△ふいくゝ　綺語抄

△石たゝき　同州　△ふつくゝ　和名抄
△ちゝぎ　△ちゝ　日本紀私記　△ちゝ
ぎ　日上△たゝくゝ　八雲抄
○日本紀神代巻いさなぎ　いさ
なみの二神始て夫婦の事を
行ひ給ひる時鶺鴒庭に来り
て首尾をたくゝと見てさう
しくいふそつぎ　鳥の名
これより其外異名も皆尾をた
くゝとよりて　寂蓮

哥　夫木
ちとなくゝ
さゝ

俳　知
怨昊の尾

狂　せ
わ

△渡鳥　此月諸鳥むらかり飛ぶ事　余月ふるぐ　國長

して多し故ふ此月の景物とをとこうり鳥と云ノ等のこゝく寒と恐きて北よりわたる渡つと来るとゝいふなあらず秋ハ草木もふ実をむすひ熟こと故りこれ是と求食そてむさ」飛ぶ中にも異国より大洋を渡り来物多し

俳　かゝるの前めこゝや波りを　芭蕉

一ひれハ川へかりゝ波りを扇甫

波りを雲ハ空そのあしたハ薫村

朝鳥渡　雁鴨　らぎ

朝ゝく山の尾

と越えきゝるとゝふ　尾越の鴨　九月ふるを

哥　万葉　あゝ山ゝ岩ゝ根ふ踏ふ越ゆ　下暑

杉ゝ坂を朝越ゆ　下暑

俳　朝きゝ波ふ波ふ波ふの一羽ハ　芭蕉

小鳥渡　秋ハ色々の小鳥渡る

ゝ口の渡鳥と同ゝ

哥　雲を分ふ小鳥ふ波ふ波ふ

何ハ波ふへの沼のもゝ　実房

色鳥　是も色々のうつりき

小鳥の渡ると云　御傘出

雀　小ゝ色そ彼ハ色ハ

全体黄

茶そ色ハ此鳥のいろくを

こし青と帯て頭背黒色く

其声清滑うてよく囀る

ヒユン　チユンとゝ

ひハ○唐ひハ○紅ひハ○蓼ひハ

哥　山家集　声せきいろゝなるとゝ

ゝ柳のめゝむひハのゝ

俳　山ゝのこゝ　ゝも弱の夫流

山雀

○山陵鳥○形ゝ

似て好んで胡桃と食ふ

舌囀つて輪とゝる鶯草又いふ

ゝとゝかゝて魚置ハ孫ゝ

哥　新六帖　山ゝ

ゝ

俳　山ゝ

ゝ

鶸

雀　小ゝ

色ゝ

茶そ色ハ此鳥のいろくを

こし青と帯て頭背黒色く

其声清滑うてよく囀る

ヒユン　チユンとゝ

ひハ○唐ひハ○紅ひハ○蓼ひハ

哥　山家集　声せきいろゝなるとゝ

ゝ柳のめゝむひハのゝ

俳　山ゝのこゝ　ゝも弱の夫流

山雀

○山陵鳥○形ゝ

似て好んで胡桃と食ふ

舌囀つて輪とゝる鶯草又いふ

ゝとゝかゝて魚置ハ孫ゝ

哥　新六帖　山ゝ

ゝ

俳　山ゝ

ゝ

種類　河原

光俊

素德

泉月

△鵠　△小陵鳥○山雀に似て少さし
○小うぐひすとも云へり此鳥
あまたゝび集つて一合して耶と故に
(哥)夫木　ことひかすかうぐひすとそしる
我ひとり秋の野ぶの草むらに
出家集　すゝむく虫と松虫ふくめの
はゝにこもむ花のしゝ多く
(俳)川柳の押なべて行る小雀汁秀

△四十雀　△五十雀　小うぐひに似て大なり
○五十雀四十雀同鳥なり惣て毛と
く此形のかうくるとて五十雀と号く

△日雀　四十雀に似て少く頭脊
赤色類のごとく黒白
まだらなる一書に緑鵠とかとうう
(俳)潮ふ秋る竜田川への日雀なる水奴

△猿子鳥　三才圖會に
いろる物又今
りてちやを物も全体薄黒いろ
胸腹うす赤尾の下に白き外両端

ふあるさんども哥ふ
まことにそうて此鳥のこゑさ
いかゝを鳴く貞猿の子のごと
しいろる哥いなし

△照猿子　藏器拾遺曰突厥雀
そのかたち雀のごと
そなにして身あり
照はこの六位の母の餌の別称と恐知
(哥)夫木　名花の蕚へふこゝろ
紅染まかるる末末ろ多く　第三季

△頬赤鳥　雀より小さく頬赤
くむひろ〳〵声
高くしてやそ〳〵
(俳)三の月ふ秋のほあれ多り　蓬馬

△畫眉鳥　鶯より大なり灰
赤色眉白〳〵名ぐく
ひ〳〵頬白く声滑ふして能
きえつる小鈴の音ふうう〳〵ちりこらふ
て片鈴くいひ〳〵ちりくコロ〳〵ちりと
ちくと鋪鈴こいふ○深山かろ

いかるがに似て啼こえ丸毛冠とかうの
(俳)かるがるの脊と鶯の色　時信

瑠璃鳥　大さ雀のおとこ　大翠
雀小翠雀の二品あり

眼白鳥　(俳)六藻ふ籠のかつ　秀石
あの目白鳥

(狂)角力とも小さけれひ　ひとつ　ふ
去年の木ふ　ひとつ　あひそする　東関

鵯　一名鷫　鶚　飛んで多くひ
らげる鷹　ふく色蒼白く
頭上の毛起る好んで草木の実
と食ふ○草木の種をへがこれ
物ハ其実を此鳥ふ食ひ糞
の中より出る全く物をとりて
まけい極て生ど扱この鳥の性こ
ざうらして常の網よかれがさい
ぐとして逆さ方ふさぐうちのの
放ると待て飛ぶく是ふ依て小あ
ふ代袋のごとくしてるるうり是
をひよどりあくといへ

(元)夫木　こがらふまこ終ふ鳥
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

(俳)ひとるハ樹の金ふ枝や　貞室
鵯のこをやうてて日和ふ蓮二　郭

島鵯　近年異国より来る鵯
卵をうらて育ひ

鵟　○魚狗　本草　魚虎鳥　三代実録
一名　碧衣○釣魚翁○水翠
○金鳥○水邊の翰　ふる幼よ
ありて魚とうかひとる雀ふう
をこ〜大さり尾ふ長かく口
ぐ〜赤く大さり腹足赤〜羽ハ
碧緑ふして尤美麗ふり
○神代巻曰天稚彦殯の處ふ
鵟を以て御食人しをしつつ
是即魚を取る故ふ其役ふ也　感

(元)春とのむ春の梢の嚶ふうも
ねぬとしかの川せゝ　公邊

(俳)鶯や彩〜桜ふ　たるき　大曾
川せゝや三月ふ祭已ふうり　芭蕉

翡翠　一名　山翠○魚翠○鵏と同物にて少し大

山谷にあり　都て赤色紫と帯て光あり

連雀

雀の大さ如し　頂に冠毛

あり雛のときは黄色あり唐の雀うとし

和名抄に出こうう

○漢名に練鵲といふ音を

同しくあれども別なり

これを本朝にて尾長鳥と

いふ　三才図会に出る次に出て

(俳)連雀や朝夕の松に孔雀　百魚

尾長鳥　一名　練鵲　三光鳥

漢名　鳥鳳○紺碧色

脊に少し赤と帯て冠毛あり

目大にして瞬き言し　其尾長さ

一尺半余ありて群飛ぶ声日月星と云

(俳)尾長や鬼の鼻打ちらす　鬼貫

(狂)うつくしや女に似たる尾長鳥　祇徳

○山のもとそ紫角鹿

啄木鳥　一名　匠木○斲木○廻

古里○尚品類あり

大さ大ゲラ位にして小ゲラ

大と大ゲラ位にして小ゲラ

相交て美なり　雲雀の毛色

もあり足は黒く前に二つ後に

二つにして壮鵬の如く大なる

りのは廻り小さくして惣身に

五色の彩色あり　是を山きつつき

紅きもあり　頭の

いづれも啄なり　古釘の如

し　木をつきて虫を喰

今テラツキといふテラツ

ラの轉じたるなり　ケラは木の薄

(発)夫木　ふるゆきの東の樹にうつりそ

あすは見るとてうつつきける

(能)あつさをは護摩焚る家の彩嵐雪

ちりくはるる柳やきつ焚き半窓

(往) 赤き衣を着てきて[illegible]林の宗
まつきろくこころくきの名員御

(詩) 啄木鳥詞　王元之

淮南・啄木・大如鶏頭・似仙鶴

△推丹沙　ワイナントイフ　大サカラスホドアルガカレヲハツルニ似テ赤キ色カウツタカイ

△鬼長数寸勁如鉄

丁々乱鑿・乾柏査　クチバシノ長サ一二寸モアリテ鉄ノコトクコトクトレテカレタカレハノウツホ木ヲミダリニツヽク

△菊戴鳥　大サ目白カラクアリ頭ニ黄ナル花ノヽトク

なる物あり一書ふ戴勝鳥とあり
唐土にては花と花勝とい
ふり故ふかく名つけたるなり

(俳) 菊ちれば色さえつくい祇宗欽　天雄

△椋鳥　形鳩より小さく頂ハ白く
背灰色好んで椋の木
ふもとにあり大小あり京師加
茂のほとりに此鳥いとおびたゝし
くなるなり美なり

(俳) 椋ほどの美なり

(往) 鷹を[illegible]ろふ麿くわさ[illegible]乙由
ゝろのむくふまを名るゝ　文海

△菜鳥　鶺鴒　○一説イカルカ也ヒワ

(一名) 青鶺鳥　○口ばし黄ふて毛
単色なり甚奇麗なる鳥なり
米を食ふ殊ふつよくして人家ふ
飼て世話なり二羽同ゝく籠ふ
入るゝたいつてこあり故一羽なくし
声甚清くしてヒチリコキとなくなり
又月星となくもあり春夏多く
なれども秋の季ゝ雌ハ色あ
しく養なるふいなりがとゝ大豆
とあるなれバ口の内にそまりて皮
とやうにてふなり

(三方) 一条中納言定高にいるを家隆々へおくられ
いるかよ豆ゝ図とゝ絵もきを
ひろうたゝい行をあくうん

△鶺子鳥　雀より大なり黄黑色食して味よし日本紀天武七年十二月臘子鳥蔽天西南より東北を飛て見る人怪異外にも數千群飛して見えず此ともとる事まれなり本朝國史和名抄等鶺子鳥又獵子鳥の字を用ゐ其故なくべからず。和名抄うれもりかつて飛ふあり云々列卒ゲ山林を滿るゲあとを故ふ獵子云々

俳　花のはる雲と群飛ふたのうれ来茄

狂　なるひとそそのとしひなるるのあとれをちしろ　德音

△鶲　大サ雀の比頭黑く白き彫あり霜うのごと

△鵐　雀を似たり枕草紙ふみことうと云ハ是ハ此鳥の目の外ふまるれふちありもくて畠物の穴の緣を金物にて覆ひたるとトメと云ふ此鳥の目を似たれいえ尤種類甚おれ

△蒿雀　此鳥形鵐ふ似て色青く黃ゑ鵐と同物にて青鵐と云ふ又或説に鵐とおきてとしつう又或説に鵐と別種ありといふ

俳　月ふふ邪まる邪ふ不二

△檀鳥　好んでかれ木に住む形鳩より小さく灰赤色眼のふち白色あり嘴二寸むなり諸鳥の名に真似び人の言をもなしふ気あり

俳　かるふ文をもなる星をめ云　文全

△額鳥　ひたいと小さく鳥ひふ邪て灰色青を帶ぶよく轉る一種照鵐あり頂に小紫點あり

俳　めくるやるる井の上るかにる羅文

△伊須加鳥　正字未詳ふちぐ上下ふひちがひよる

鳥なり故ニ世俗諸事翻翻
[illegible]いをうとつゝ又暑して
すゝもいひ又轉じてをうと
んとつゝれと又轉して江戸
[illegible]
俳いをゝ名ゝ志ゝの場を[illegible]鹿松
狂石膏とつゝ消ゝるそゝをうゝふ
医師ゝいをゝれをうゝ巳ゝ角鹿

初雁

八月初候ニ鴻ノ來ると
礼記ニ見えをり此ころ
早く来るノをいふ哥にも
初て来るなどよゝ志ゝ九月ニ

初ノ[illegible]ある哥も有八雲抄
○元来ノの此項南ニ来るとい
北の国ハ寒氣甚しく雪深く
餌ニ乏しゝ故南の国へゝるゝ

(哥)室治百首　初ノ　信実
[illegible]の秋の小井玉つさのゝゝても
今ゝそあれと[illegible]ノいゝ[illegible]
千首　近初ノ　耕雲

寄あ[illegible]ノのゝ[illegible]ノ[illegible]
いなゝ[illegible]ノ初ノ乃[illegible]

(詞)初ノの[illegible]○今朝少そもゝ。
今[illegible]ノ

(俳)初ノやゝ[illegible]ノ[illegible]
初ノや[illegible]後竹

雁

△ノ音　△ノ金　△
△ゝノ　△ノ　△天津ノ
○ノの[illegible]△ノの玉章
異名　雲侶○霜翰○蒼[illegible]野

鵝[illegible]ノ梵書ニハ僧婆といふ
かゝとハ[illegible]音[illegible]ノと云説あり
て[illegible]ノ詠ノ来[illegible]。又万
葉集ニ[illegible]ハ今ハ[illegible]
詠ぞると以て[illegible]れいノの名と
[illegible]ベし大抵四種の別ちあり
○真雁○白鵝○白雁[illegible]△雁金

鴻

△野ノ[illegible]漢名　[illegible]
○性多淫すて他鳥と交

鴻（ひしくひ）△菱食（ひしくひ）ともかく。ゟの大なるをかりと云。かりのおうるく
ごとしく歩うして羽毛も
變まりもべて鴻と同し

㊊ 夫木　かりがね　家隆
冬ごもれかきても秋ののをかく
れ　ゆく雲そゆく早田うべし
ことよ㐂月さよいふ秋やさむき　重之
都に来るかりがね衣
秋風や志しゝ（かりがね）一つの　師光
おとらを考て鳴かりの

㊋ そらに行て。今ぞ井とせうる。はさまかりがね。そろふをぐる。なのうらがね。けさゝまうろ。
ひとつらるゝ。家雑て。うけて来る。
娶う来る也ん。冬きぬらふ。かつそへはへ来る。秋風の吹をまを。秋深さを望
ゟのつらとい。そろへて越ふゆくなり。ゟのよぶ時行列を
ゟの玉章（たまづさ）ともるゝゟのいそされ多とみて来るれるつき

の擬戯る故事　ゟの使（つかひ）これもそぶが
の死はまるを　都まなりかる
涙（なみだ）ゟの涙ハ春さゟのかなくて
をるてありのなり
琴（こと）ゟとことぶ　舟（ふね）みさきゆく
衣う川（ころもがは）ゟは擣衣に縁ありゆへに
くまを合せうゝぬるものなく

㊉ ゟもまけ萩はまらの秋の声　宗祇
㊇ われてかぐす秋風　宗祇　肖柏

㊌ ゟもなようとおふ引来るの　紹巴
ゟとまれて鳴つく声の寫れ　蘭更
ゟの影落て水をも野川かれ　不二

㊎ こそのほとを忘れて来るゟ
羽風にきえをゆるゝひく　常樂菴

㊏ 雁五字對句　同上

忽聞涼雁至（タチマチキクリヤウガンノイタルヲ）　下時波勢出（クダルトキハハセイイデ）
如報杜陵秋（コトシホウズルガトレウノアキニ）　起処陣形分（タツトコロニハヂンギヤウワカツ）

㊏ 全七字對句　詩礎

数声飄去和秋色（スウセイヒヨウキヨシテシウシヨクニワス）
雁幾群（カリイクムレ）

詩　聞雁　玲瓏窓

一字横來背晩暉　暮天飛

虹影侵堦驟雨餘　声々新

雁渡雲衢

彎弓欲射仍停手

只恐燕山有帛否

タハモシ北国ノ燕山ヘ軍ニ往タル人ガ郡ヘノ文ヲ此アニコトヅテヽオコシタルモアラフカト思フユヘニヤ

雁之故事

【雁四徳】本艸綱目ニ云寒ル時ハ北ヨリ南ヘ行ク熱クナレハ南ヨリ北ヘカヘルハ信ナリ飛ニ次第アリテ前ヨリ段々鳴ツルヽハ礼ナリ偶ヲウシナフトキ余ノ鳥ニ配セザルハ節ナリ夜ルムレヤドリテ一羽ハソノアタリヲメグリテ守ル晝ハ芦ヲ啣ヘテ矢サキヲサクルハ智ナリ已上ヲ雁ノ四徳トスルナリ

【雁書】漢ノ世ニ蘇武胡國ヲ征伐スル時大将トナリテ向ヒシニ軍破レテ匈奴ノ虜トナリテ帰ルヿヲ得ズ然ルニ匈奴イツハリテ蘇武ヲ死シタリト云ヒ其後和睦トヽノヒテモ蘇武ヲ帰サズ漢ノ昭帝蘇武ガ死セズシテ匈奴ニトラハレ居ルヿヲ知リテ使ヲツカハシテイハシムルハ帝折節アヲ射サシメ玉フニ其雁ノ足ニ蘇武カ書ヲ結ビ付タレバ蘇武ハ未ダ存命居ルナラン帰スベシト申サセ玉ヘハ匈奴大ニ驚キ蘇武ヲ帰セシトナリ実ニ雁ニ文ヲツケタルニアラズ漢ヨリハカリテ斯イハシメタルナリ

鷓鶘　昌琢の説ニハ春と貞徳の説ニハ秋とす渡つて来る時定まらず小鳥の日本へ来るハいづれも秋

ゆへ此鳥も秋しくすると三月生類の部ふ委しくあるなり

鵠　△日雀しゐかくく。形雀ふ似て小さく脊ハ灰赤色腰白

鷦鷯　○たくそ鳥○巧婦鳥○狀黄雀ふ似くう

鵠鶴　大さ兄鵠のごとく首眼猫ふ似て又老くう鬼ふ似くう故ふ鬼しゐ日本紀ふ見えくう

俳　本発の稿ふ落くう物ふ琴風

鮭　正字鮏なり○大年魚とゐ狀鱒ふ似て肥大なり二三尺四五尺細鱗あり○鮎と同じく春江海の間ふ生じて秋ふ至りて河上ふ上るゐ秋の末ふ黒点と芒て死とゐ一年限のものの故ふ鮎を小年魚とゐ鮭を大年魚と云なり奥羽の間ふ多し天川武隅名取川等の物上品なり

俳　水上ハ天物なりゐ鮭の名ふ潘山

(云)きのふたちくふきてこれハ天川をもやくろびてさけのかくゐ

鮞　鮭の子なり二胞あり胞中数千粒をそなくうさ南天の実ふと又筋子丹子と云物あり

俳　はらこと松茸ふ入れ煮て母子丹恵巴

狂　えゐゐふふらごゐふ徒ふれも

それハ釈かはなれハ種の子　若良

加志加魚　△かう嘴○説々紛々として未たしかを知ず

ハむべなり是ハをべて山川ふ生ずる魚の○ぎど○いど○ごと○ぶり○かまつか○ゐくゐ川の中ゐてギゝとゐく声あり鹿ふ比して

かどうゐいう必一物ふあらず諸々方言も有なり又一種春季しするかどうハ魚とあらべむりゐ井手の蛙しいハ物なりと

此説藤堂樂庵初て云出しなるゐりかくぶりハ杜夫魚なりか

まつかハ加茂川まで州まてハられと石かとしく和不分明うり

俳 俗うて蘭仏桶ゆ懐書

△江鮭 本艸 鯢○草魚○鰱と見えたり 大和本艸ハ鱧魚とかけり○状鮭ハ同し湖中ハ生をの物名と異はて形少小也

俳 あめ(奥今ハ幸俗の宿ハ六成)向紙の名井さやうれあ奥 昌慶

狂 こをそなまこ洲のあ紙ふりうるしさへ変仮の写 行理

△太刀魚 形うすく長く銀箔の光あり太刀の白刃ふとく似たり故ハ太刀魚くしく

俳 太刀魚や今も八条ひろうて殺三ツ八の左刀魚光る事秋ハ 萬柳

狂 太刀魚と今ハてそ〻れてくこれハ太刀うをいさのこまあてくるるかもやつこまもつこ地てくるあろハ知保著

△落鮎 △鏘鮎 正字鰌 李草○年魚 和名抄○夫鰌い正二月の頃江海の間ハ生し次第ハ河上ハ登る石間の瀑布何程水勢こはけしくも凌ぎそのゆり夏の頃漸肥て味美こ中秋尤長大ゆして尺ゆ及ハ此時草間ハ子て生し七後漸く衰ハ故ゆ流まハ遡ること あるこゆ水ハ隨ひ下る故落鮎こいこくこいり此後全躰ハ黒班の点と生ぜこれとさびしくいく

兮 ゆ年ゆや流ゆる新の川柳 ゆ紙ようちる秋見そうく 家隆

俳 さび鮎やわかい山と空るうけて 蕪村

狂 たくさへのはのかさへ紙のおちけ木のあもおうう後し 国長

△梁 梁い魚をとる具く川の両岸より石堰中を一丈

計明て水と下し其処へ竹の簀と斜に掛さし置水い簀と潛りて流る魚い水勢にあらがひて簀の上へ躍り上る所をうち

(三)　夫木　くゝふぞや世ふる川の下りゝ水かくるこゝろ何なるらむ

崩梁　秋涼しくなりて魚の下に居る魚梁も河水に流

(九)　る崩る次第にしてしてあらさるなつかしう

(俳)　岩に梁あらはれる魚梁も衰へ尚白

(一)　梁てしてゐるゝ秋と岩に寄せ

蛇穴入　俗に曰春の彼岸に出て秋の彼岸に入と云

月令に蟄虫坏戸といふ諸虫皆かくれとし然るに蛇は穴瑕るゝ能と多分鼠の穴に蟄と其蟄をる時土と含んで穴に入春穴と出るゝ此土と吐く是石と化をへこれを蛇黄といへり

此部に八月一ケ月の要用の事をあらす

破軍向方

夜五ツ酉ノ方	夜四ツ戌ノ方	夜九ツ亥ノ方	
夜八ツ子ノ方	夜七ツ丑ノ方	朝六ツ寅ノ方	
朝五ツ卯ノ方	昼四ツ辰ノ方	昼九ツ巳ノ方	
昼八ツ午ノ方	昼七ツ未ノ方	暮六ツ申ノ方	

日刻　酉の日酉の刻申は日申の刻

(日)　事とるすに用ゆべし月建へ

出行作事　東北の方へ向ひゆくは今月天道

東北へゆく或い普請又ハ土とるこ

とをとるにも東北の方とはとすること

樂事　月の道遥虫の夜遊い

(ゆ)　きゝてもいとす暑さ消

きゝぞ紅をぶしこさ風袖ふるし

草ふまるる曉の露木にい匂ひ

とゝ知るゆゝと夕暮のなのこと野の

山の花錦と考さて籬庭ふ色

鳥のいろをあらそひをどて與と獵ふさぐることなし。

占候　此月外の日庚の日三ツあれハ米麥とうわ。虹あるい春ハ雨ふり米の價大ふ貴し。秋分の後霜多くれハ病あり

天氣　此月日和のうること早くして見さぐさぐ八月うり暴風折々おこることあり海上慎むへし。○雲ハ西より行と日和とす北より南へ行と雨とす。○水まさて雲ハ雨ふ多然ども初めハ雲うすくして散ぜんする水まさてハ日和うり。○赤き雲くもハ災あり。○紫の雲ていハ大風くハ戌亥ハ雲あれハ風生ぞろへ此月陰氣さくふのぶるふうり極めて風も高くあがり大風ふくことあり。○西風と日和くくハ南へよりても北へよりても

日和とし。○北風ハ雨ふり夜分ハ吹ハ夜北ハ日とと称して日和よ

衣服　帽子と着ものあり袴ハひハ色とりちゆ

時色

萩經青　竪青緯蘓芳なり裏あとー

二藍　紅花と青花とそ深る

蘭　表裏とハ紫

葱衣　表薄りへぎ裏青或ハ此草ハてをりもすべ

女衣服　八月朔日より十五日まで八月ハ袴ハ袴よ。○ハ

うあのうすやう。○薄をうさくのうハやう

うすき白きひと

龍膽　かさねうふ同じきく又もみぢみとあり

○八月十五日より九月八日まで

綿まきゆとの衣うりをうれ

うす色白き菊りぢ行りぞ筒

養生

素問曰脉の秋を生ずる氣逆する事と苦しむ苦を食して是と下さべし亦酸を多くして是と收ひて

此月は涼氣来りて人多く風に感じて病をおこす慎て風とさく塵一この月多く生冷の物を食べくまず

○白露の節後い毎日丑寅の時両手をとりて正しく坐し膝をゆるし首と左右にめぐし各三五て両手をも左右にめぐし度歯を叩き内に吐して液を呑み又かくのごとくして腰脊の経絡風の滞り狂癇癱等の症を去べし尚委しくは歳時記に出す

月のそこ多ふるの苗を踏みくだくべしよく去るべし

其外此月用意の品歳時記に委しく出をゆへ略す

飲食

此部は人力をもて製したる食物をあつむ

鰒

鰒の二すなわち鰒

東都及び関東筋そい生の鰒の三寸已下なるものをいふ称へ四五寸なるものをいふ

俳 冷やしと大ふくを観る 夫流

狂 小いかを出てあぶりもかくき浮世ふるをあるいろ乳 皐月

味くはつ秘傳

いかれふるものを頭をとりて梅酢に一日ひたつ引上げ其後三ヶ日ごとに半日ひたりて引上げ鉢そも捕えも入れ出すべし

○され贈い身とさき骨と去て生ふて酢或い味噌に調味を作をい

鱠内そこれとめてとしいふなり

鰯黒漬　豫州の産　鰯を切り　丸　さらして塩水か和ぬる

新酒　○あらき酒とも云又早く出る故に新走とも云

酒は唐土夏の世より初る日本にては應神天皇の御時より

そもそもあり人つくりは

博物筌に出てそうし

能　松風に新酒と呼とあり道に蓮二

堂嶽にて見るあやうく新酒百史

狂　酔ふはいかあらたふとさめの世のふるうとはさあらそすれ　不一

涪　酒の熟していまだ滓を去らざる汁滓交るをいう

中汲　酒のもろみを濾して清ざるへ色白酒のごとし

酒ともろみの間ゆへ中汲といへ味常の酒よりまさりて美そう

醂醾漉　是は唐土の名へ酒黄色ふにごりうるといへ

酒異名

聖人　色清味の好のことを云　賢人　色金の味のことを云　愚人　色ろく味のことを云　小人　てんやの酒のことを云　天中記出

杯中物　李白詩出　羅浮春　東坡詩出　忘憂物　同上　玉醴　十洲記出　釣詩鈎　東坡詩に出

掃憂帚　同上　麴生　開元傳信記出　玉液　事物異名　芳醞　同上　清醴　周礼に出　美禄　漢春に出

亮酒　白氏文集に出　杜康　事物異名に出　破悶　将軍　同上　瑞露　東坡侍に出　葡萄酒　三輔決録

狂茶　天中記出　歡伯　易林に出　竹葉　孟浩然詩　流霞　詩学大成に出

和名　むらさけ　万葉

竹の葉　夫木に出　みき　日本紀に出

酒種類

醥　酒也　醥　酒也　醥　酒也

醇　あつき酒　酎　正月に出て八月に是　醄　酒　醴　ひとよ酒　醍　いろあり酒　醪　むさけの酒　醪　もしにのむさけ

○日本酒の種類いろくあり出る時節により四季の内に出を

歌 万葉 ひしり 大伴旅人卿

酒の名をひしりとおほせしいにしへの大きひしりのことのよろしさ

夜ひかる玉といふとも酒のみて心をやるにあにしかめやも 全

あたひなき玉といふともひとつきににごれるさけにあにまさめや 全

竹の葉にまかれのころくさそる花をふくらん玉の盃 隆季

菊ねよてさかひのとよさけのくみし いくとせとあかてぬき 俊頼

あふさけれ二瓶のさかつきかとてます 秋のよもちぢれちてもまく出しも 長屋王

木の葉にもれつもる落葉もれつ見えて 家あまてむる秋乃さかつき 後京極

俳 屈原も又呼られん酤るる 天雄

もろ酒は紙の津を掃もれ 凡久

木の香こもやはきかりつらし 文全

狂 かくしろ酒のちからいかりくくの 神ならきもかなふ物かは 行安

酒のみは百万騎でも寄せてこい 酒のみくらのそなへあり 貧道

詩 酒五字對句

色笑榴花重（イロハハラフリウクハノオモキヲ / サケノイロハザクロノハナヨリヨク）

光浮蘭葉翠（ヒカリハウカベランヨウノスイヲ / サケノヒカリハランハノアヲイイロヲウカベ）

香兼竹葉醇（カウハカヌチクヨウノアツキヲ / サケノ香ハタケノハヨリヒトツニカウバシイ）

色借鬱金黄（イロハカルウコンノキナルヲ / サケノイロハウコンノキイロナヲカツタヤウナ）

詩 酒七字對句 詩發

暁日着顔紅有暈（キヤウジツカンニツイテクレナヰニウンアリ / アサヒカゲガカホニウツヽタヤウデホンノリトアカク）

春風入髄散無声（シユンフウズイニイツテサンジテコヱナシ / ハルカゼガ身ニシムヤウデカラダウチヘヒガヽハツテサムウナイ）

喧疎溜

咽暗水

詩 酒之詞 林和靖

温如春色爽如秋（ウンナルコトハシユンシヨクノゴトクサウナルコトハアキノゴトシ）

一榼樽前自献酬（イツカイソンゼンミヅカラケンシウス）

酒ヲノメバカラダノアタヽカニナルハ春ノヤウナリ気ノサハヤ

カナフハアキヤウナニヨツテヒトツ・ナカヅキヲモウテタルノミヘデヒトリサイタリオサヘタリ

レテ井ル百万愁魔降不得故應

用爾作戈矛カズ〳〵ノウヒヘヲタイヤスルガナラヌユヘ

ワザ〳〵酒ノカタヲ船トシテタノウレヘヲオヒシリゾケルナリ碧香膩

月能避冷破暑還須白鱸蒓

碧香ナドヽ云メイレヨウノタバラウ月ニモコクヲ寒キヲフセギ又レヨノジブニハ百パイモノ・デアツサヲフワスレル好比阿房無限勝大寒

大熱此中藏コノタノレミヲアツ・ヒヒクラベテミレハヨツホドマサツテマルヤウニハ大タモ大タモコレサヘメヘトンワスレルユヘジヤ

酒樹

頻遂国ニ樹アリ石榴ノ似タリ其花ノ汁ヲ採テ親ノ中ニ停レハ数日ニシテ酒トナル味ハナハダ甘美ナリ

顧建康

顧憲之云人政ヲナシテ甚人和ヲ得タリ故ニ人々味アツク旨キ酒ヲ顧建康ト号ク其清クシテ且美ナルヲ云

八月飲食並料理献立

禁物

生姜八九月食ハ屋ヲヤブル

委〳〵ハ九月の部ニあるを

○茄子秋の後多く食ヘベシ目ヲ損ず○烏羊小児ニ宜シカラズ

好物

鬼肉今月より十月まで食ヘベシ他月ハ宜しからず

料理

汁

竹輪かまぼこ　はけ　ゆ

ちり蛤　青うんぶ　こーすり

車えび　ぶり　うんぜん　小いも

はらくま　むろ　ごの子

ほうれん草　ぶり　はも　こんぶ　かいうど

方ぶん　ぜんまい　ぶり

清汁

鰕　おろし大根

鰕　ぶり

はは　ぶり

ぶり　はも

膾

きすご　のり　はぜ　しほ仕立

伽羅　あらがい　たこ　ぶり　くらげ

さより　あこび　たこ　れんこん　ぜんまい

あこび　ほうれん草　ふくらげ　かんぞう

さとうも 糸づくり
水くらげ
たらんぼすもた

あ田ミ甘 いさぐり
しらがこやうが
葉せうが

くらこま口切 くらげかんてん
ちしやうにんじん・しそ
蕎しめ わさび

みまりぶし
ごまくらげ
ようせうが
くるみ・ざくろ

差味

さしみ
鰹細づくり 慶みげ
こまきび いろざけ

たち魚
ちさん
きくらげ
みんが子

あのしろ糸作り
れうけ
ゆずみそ

あ田しらえ えりぐり
ひらぐせん
こまきび いり酒

生さけ
れうけざるむす
いり酒 ゆずみそ

生鱸 つくり身
かつのみ・せうがとろを
わされんそのあの稀

煮物

にもの
雁 松茸
ごぼう

たまう身
しいたけ
稀ぶろ

はも むまそうし
松いも・岩たけ
きくつ・ごせう

赤がひらんぎり
玉子うが ふろげ
こまきびそかけ

ちぜうんぷう
松茸・ぶえあえ
きうせうが

生麩・牛蒡
岩たけ
こまきび

こんうすそ
あさびせん
ごぼう

焼ぐるみ
ごぼう
のり

小いも
かぶら
ゆ

鴨・稀ぎ
太うん
とうさんしやう

和會物

あへもの
あさでこ
はしるみ
さんしやう

くし行みもび
松茸・けし
ふそあん

あさり
うり・せうが
たであん

生志のたけ
玉子まきそえ
あん

唐きさい
わうし
ふうあん

それぐり
ひらこけ
うそあん

たこつぶ切
松茸むし
せうが

吸物

すひもの
唐ださいらぎ
玉子うが 小口切

鮎 やきそ
うすこそ
とうさんしやう

精進 汁

しる
竹輪かまぼこ
蓮芋こまきび
そるゆ

かもうり
めうが
さんあえ汁こ

生ふけ
やきだうふ
やえだうふ 小えん

かぶら そうめん
ごせいこ あく

長いも 巻天
小えのみけ
ゑのまうふ

ふづく
しめさけ
やえだうふ
ごせう

松茸
九年母
せり

ひりうご
うどうだ
めうど

膾

なます
青魚 ごんさん
赤くらげ
くりせうが
きんかん

玉子巻・ゆうが
大こん・赤くらげ
くりせうが

うんぬやくうど
赤いくらげ・のり
そり・くるそず

浜よし・大こん
妙茸・せうが
さゆん

あげ麩ぬ・うと
せうがのひもの・そり
きんかん

かやく
あげくるみ のり
松茸・さかえ

清汁

すまし
ちよ麿ぎ
しその葉

ひりうご
玉子巻
こしやう

酒肴のうたくえ
こせうの比物

うみそうめん
つまこまいも　他あんまる

差味

さしあじ

かんてん・うこぎ・海おこう　ぬたん
うちまく　いりざけ

松うけ　あるふー
いそうけ・こやうが
ゆ　いりね

こうま
剥く孤んぽ
くいこうる　いりざけ

あげふ・かんこん
ぬたこうげ　ぬたこそ

糸こんあく　味付
くず・ゆりね
ぶうけ・こうがとぬたこそ

煮物

いもの

こぼう小品
やたこぐう
あんこうげ　ぬたやとぐる

志めじ・地ふ
ごぼうせん
のろ　ぬたく

松うけ　やたいも
やきこぐう
うまぐど　そうぬ

やきたいも
さしげ
かたごやう

和會物

あへそのもの

青あへ

ぬきこぼうとあ
やきごぐう
さぶうこそあへ

やうがうけ小口
ゆりね
松肉あへ

塩ひけのこ
こぼ
かしあへ

うこと豆
ごぬこんせう
あへ

時物

魚

ぎぶな。こう。まるがつお。
太刀魚。い臣。きすこ。ひろこ。

鳥

ふう。はと。ちだ。むくり。
だん。ぬず。かる鴨。ふる。

桜雨堂